

平成28年度 文化庁 大学を活用した文化芸術推進事業

“美術館等と連携する地域アートプロジェクトを活用するアートマネジメント人材育成研修プログラムの構築と実施・評価”

「アーツでまなび アートでつなぐ!まえばしアートスクール計画@群大×アーツ前橋」

2016年5月14日(土)～2017年3月31日(金)

発行:群馬大学茂木一司研究室:群馬県前橋市荒牧町4-2

アーツ前橋:群馬県前橋市千代田町5-1-16

発行日:平成29年2月23日

発行人:茂木 一司

主催:国立大学法人群馬大学

共催:前橋市

助成:平成28年度文化庁 大学を活用した文化芸術推進事業

後援:群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、朝日新聞社前橋総局、産経新聞前橋支局、上毛新聞社、東京新聞前橋支局、毎日新聞前橋支局、読売新聞前橋支局、

共同通信社前橋支局、時事通信社前橋支局、群馬テレビ、株式会社 エフエム群馬、まえばしCITYエフエム、ラジオ高崎

冊子制作:NPO法人多様性と境界に関する対話と表現の研究所

冊子編集&デザイン:デザインユニット つむり

## 実践講座Bコース 実施報告書

# まちなか

アーツでまなび

# だれでも

アートでつなぐ!

# 場づくり

まえばしアートスクール計画@群大×アーツ前橋

# コース



平成28年度文化庁 大学を活用した文化芸術推進事業

「美術館等と連携する地域アートプロジェクトを活用するアートマネジメント人材育成研修プログラムの構築と実施・評価」

## 目次

# 前橋まちなか研究室

## 《まえばしアートスクール計画》 と Bコース《インクルーシブな場づくり》

《まえばしアートスクール計画》は群馬大学とアーツ前橋の連携による文化庁のアートマネジメント人材育成事業で、アーツ前橋の館外での地域アートプロジェクトの仕組みの中でアーティストと創造的協働で学ぶプログラムです。前橋が(生きもののように)“アートによる学びの実践共同体(community of practice)になる”、“まちがワークショップ(化)する”というイメージです。

“現代はアートの時代だ”というルドルフ・シュタイナーの言葉をより真剣に考えています。問題は専門化した世界観が生む断片化した思考や身体が生み出す希薄な関係性と差別の解消です。アートの学びは冷えた部分をつなぎ直し、全体性を回復します。

その時“弱さの力”(鷲田清一)に注目すること、つまりこども、障害者、高齢者などの弱者、社会のなかで生きづらさを抱え、アートから遠いところにいる人々をアートによってつないでいく、すなわち大きな理念はインクルーシブアート教育の実践です。

実践Bコースは、広義のアートを活用し、“ひと・もの・こと”をつなぎ、場(コミュニティ)をつくれるマインドとスキルをつけたい人のための講座として開設しました。

専門化しすぎた社会の中ではよいことをやってもつなげられないので発展しない人や場がたくさんあります。

そんな人たちのために、さまざまな場ですでに成果をあげている講師たちと対話し、自分ごととして実践を考えるプレーヤーが育つことを願って開設した、“まちなかだれでも場づくりコース”です。

茂木一司

- P02.....まえばしアートスクール計画について
- P03.....総合ディレクター 茂木一司 あいさつ
- P04.....Bコースの概要
- P05~P06...Bコースの流れ
- P07~P08...全体講師より
- P09.....Bコース活動風景
- P10~P17...対話ゼミ Report
- P18~P27...実践ゼミ Report
- P28~P32...集中講座 Report
- P33~P34...Bコースで見えてきたこと
- P35~P38...対談1 坂倉×茂木
- P39~P40...対談2 坂倉×住友
- P41.....参加者の声
- P42.....STAFF

# ごあいさつ

疲弊した前橋の中心街に新しい美術館・アーツ前橋ができて、まちにちょっと血(知)がめぐりはじめたと感じたときに、この文化庁事業を受託しました。実は自分も9年前に《人茶workshop café@前橋》というコミュニティスペースの実験をしたことがあって、それがアーツ前橋への関わりにつながっています。当時(今も同様ですが)蛸壺化した本領域の振興のために出された提言に基づき、「人文・社会科学の振興プロジェクト」が立ち上がり、「芸術の社会的媒介機能・芸術とコミュニケーションに関する実践的研究」という長い名称で大阪大学と協働で5年間ワークショップ実践研究をして、その総括としてカフェの実験(サイエンスカフェ人社版)をしました。約2か月間、週末のイベントやOPENカフェ、公開授業を一生懸命やりましたが、イベント以外にカフェに人が来ることはありませんでした。そんな苦い経験にめげず、今回《場づくり》をテーマにしたのは冒頭の微熱への応答です。“前橋には何でもあるが何も無い”この厳しいことばに反論したい!講座を進めていくうちに、テーマは自然と子育て、つまり“女性の働き方”に焦点化していきました。さまざまな場で子育てを活かす働き方を実践する講師たちの話は今後の日本を左右する重大なテーマだと気づかせてくれました。その中で広義のアートの活用がポイントになっていることも確認できました。

最後に、コーディネートをお引き受けいただいた、坂倉さん、井尻さんをはじめ、講座の運営をしていただいたスタッフの方々や受講生など、すべてみなさんに感謝します。

(総合ディレクター・群馬大学教授 茂木一司)



茂木一司 (もぎ かずじ)

群馬大学教育学部教授。1956年群馬県生まれ。筑波大学大学院修士課程芸術研究科デザイン専攻修了。九州芸術工科大学大学院博士後期課程芸術工学研究科情報伝達専攻修了。博士(芸術工学)。鹿児島大学准教授を経て、現職。構成教育(Basic Design)、R.シュタイナーの芸術教育などから、身体・メディア+学習環境デザイン+アートワークショップ+障害児の表現教育、そして現在インクルーシブアート教育の構築に関心をもち幅広く、実践及び研究中。著書に、『協同と表現のワークショップ第2版』(代表編集、東信堂、2014)、『色のまなび事典』(全3巻、星の環会、2015)ほか。

# 話をきいて、みんなで考える 自分たちに必要な場所をつくるための7日間

アートによるまちづくりには、多様性を活かし、

対話を通して場づくりができる人材が欠かせません。

コミュニティ研究、インクルーシブな場づくりを実践する坂倉杏介(東京都市大学)、

NPO法人多様性と境界に関する対話と表現の研究所とともに、講座を運営します。

まちには、すでに多様な人々が暮らしています。

子ども、学生、会社員、商店主、主婦、母親、父親、おじいさん、おばあさん・・・

そうしたひとり1人が自らの力を活かし、いきいきと暮らしていくために、

まちにはどのような「場」が必要なのか。

前橋のまちなかをフィールドに、レクチャーと対話、

合宿や実践形式のワークショップを通して、

「多様な人が集い、つながりと活動を生み出す場づくり」を考えます。



# Bコースの流れ

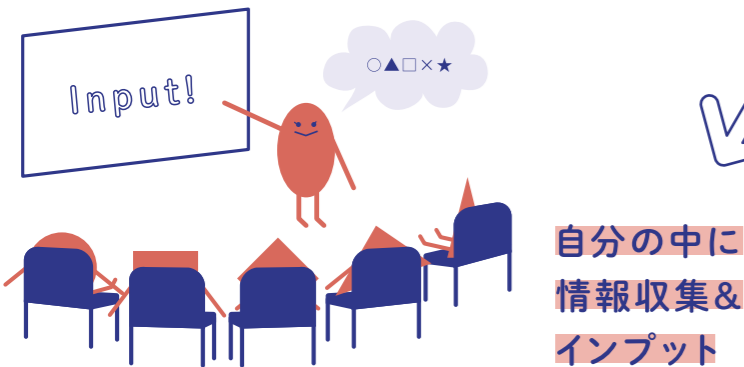
実践講座Bコースは「まちなかだれでも場づくりコース」というタイトルで、参加者のみなさんと一緒に『前橋のまちなかにどのような場があるといいか?』ということをや半年間かけて考えてきました。「だれでも」というだけあって、参加は途中の回からでも可能。毎回初めての方がいらっやいました。こどもスペースを設け、子育て世代も参加がしやすい講座をめざしました。

対話ゼミ3回、実践ゼミ4回、2日間の集中講座を経て、終盤には前橋のまちなかでの場のイメージが共有されていきました。

## 対話ゼミ

毎回、多様な分野で場づくりに関わるゲストを2名迎え、その活動についてお話しいただきました。

その後、参加者も交えてディスカッションを行いました。



自分の中に  
情報収集&  
インプット

## 対話を通して

他の人の意見や多様な考え方に気づく。

いろいろな分野の話が聞ける！  
盛りだくさんの参考になる話を、  
前橋や自分に置き換えて考えてみる。  
どんどん場のイメージが膨らむ。  
対話を通して、自分の周りや前橋ではどうなのだろう？  
ということ深く考えてみる。  
疑問が沸いたら、その場で質問したり、話したりすることで、  
自分の考えの幅が広がったり、新しい視点から見たりすることができる。

ゼミ1 Theme  
まちでコミュニティスペースを運営する

Guest  
岩中可南子 × 加藤亮子  
(シバウラハウス) (芝の家)

Dialogue Keyword  
コミュニティスペース、母親の働き方、  
ローカルビジネス、多世代が集う場

ゼミ2 Theme  
地域の人の力を活かしたアート活動

Guest  
吉川由美 × 小山田徹  
(アートディレクター、演出家) (美術家、京都市立芸術大学)

Dialogue Keyword  
アート、対話、地域の人の力を生かす

ゼミ3 Theme  
まちなかの多様な「働く」を考える

Guest  
井上拓磨 × 国保祥子  
(HanaLab.) (静岡県立大学経営情報学部)

Dialogue Keyword  
地域の人材プラットフォーム、地方の女性の働き方、  
学生/ビジネス/母親

さまざまな分野での  
実践のお話しを聞く。

## 集中講座

2日間の集中講座は、これからの社会や、これからの地球に必要なものとは何か、大切にしなければいけないものは何かという本質的なテーマについて、2人のゲストの話を中心にみんなで対話していく講座。また、ギフトサークル・ワークショップやオープントークイベントを通し、じっくり考える時間をもちました。

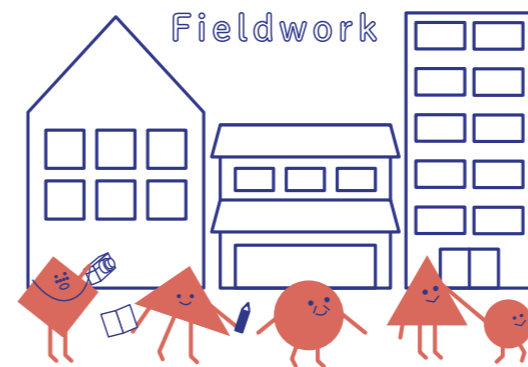
ゲスト講師：熊倉敬聡(芸術学、元京都造形大学教授)  
長津結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院コミュニケーションデザイン科学部門助教)  
オープントークイベント：  
「前橋のまちなかのこと、これからのまちのこと、一緒に考えてみませんか」  
ゲスト：熊倉敬聡(芸術学、元京都造形大学教授)  
長津結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院コミュニケーションデザイン科学部門助教)  
住友文彦(アーツ前橋 館長)  
茂木一司(群馬大学教育学部美術教育講座 教授)  
司会：坂倉杏介(東京都市大学都市生活学部 准教授)



Dialogue

## 実践ゼミ

実践ゼミは、9月～12月まで計4回実施。  
毎回1名のゲストが自分の活動や考え方をレクチャー。  
そこに散りばめられた言葉をフックに、  
フィールドワークやワークショップを行い、  
前橋のまちなかに、あってほしい、あるといい、場を探っていきました。  
そこで自分がどうやって関わっていくのか、  
みんなと自分の場づくりについても考えました。



実際にまちなかへフィールドワークに出かけて、  
インタビューや物件リサーチを実施。  
住んでいる地域なのに、  
知らないことや新しいことをどんどん発見。  
まちを歩くと自分とまちの関係性に改めて気づきます。

話を聞く → 対話する → 実感する

対話ゼミ + 実践ゼミ +

+

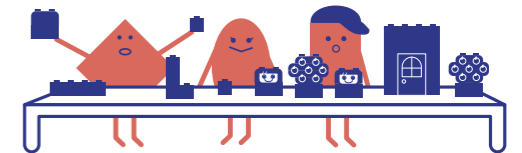
集中講座

本質を探る議論の場

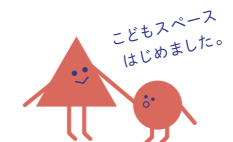


多様な人が集い、  
つながりと活動を生み出す場づくり

Output!



ワークショップでは、話しながら、  
ブロックを使ってアイデアを表現したり、  
書きながら考えをまとめてみたりして、  
「場」に必要な要素やみんなが知りたいことを出していきます。  
場づくりに必要なことがだんだん見えてきます。



今みんなが目している場にはどのような  
アクションが起こっているのかレクチャーを聞く  
↓  
参加をひきだすこと、創造力を活かすこと、  
デザインとアクションの関係性、  
人がつながっていくプロジェクト  
↓  
ワークショップやフィールドワークで実際に見たり聞いたり、  
人と話したり。  
↓  
私たちが考える  
「前橋にあるといい場」が見えてきた!

# 全体講師より

6月から12月までの半年間、全3回の対話ゼミ、全4回にわたる実践ゼミ、そして2日連続の集中講座を通じて、多様な人々が自らの力を活かし、いきいきと暮らしていくために、「前橋のまちなかに、どのような場があるといいか」について議論してきた。対話ゼミでは、各回2名ずつ計6名の多様な分野のゲストと共に場のイメージを膨らませ、実践ゼミでは、経験豊富なゲストの活動を参考にフィールドワークやワークショップを通じてアイデアを構想。また集中講座では、より大局的な視点から豊かな暮らしを実現する前橋の未来について語り合った。「誰にでもオープン」な講座としたため、毎回初めて参加する人が加わり、最終的に参加者総数は合計約80人に。終盤には参加者同士の関係も深まり、実践ゼミは毎回13時から18時までと長丁場だったにもかかわらず、ゲストの話に熱心に耳を傾け、ワークショップでは熱い想いやアイデアが飛び交うようになった。こうしたプロセスを経て、私たちに必要な場のイメージが次第に明らかになってきた。それは、女性や若者、シニア層など多様な世代の人々がまちなかに集まり、そこでさまざまな創造的な出会いを通じて、自分自身の想いを確かめ、地域との関わり合いを実感し、前橋ならではの新しいライフスタイルを創出していけるような、多彩なエンゲージメントのハブとなる場である。ここで描かれた場のイメージがどのように展開するかはまだ未知数だ。しかし、東京にはない<前橋のまちなかのオルタナティブな文化>が、さらなる多様性と広がりを持つために、そうした空間装置が大きな機能を果たすに違いない。そんな期待感に満たされた講座のエンディングであった。



坂倉 杏介 (さかくら きょうすけ)

東京都市大学都市生活学部准教授。  
慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修了。同グローバルセキュリティ研究所特任講師を経て現職。「芝の家」や「近所イノベーション学校」の運営など、コミュニティの形成過程やワークショップの体験デザインを実践的に研究。三田の家LLP代表。NPO法人エイブル・アート・ジャパン理事、NPO法人多様性と境界に関する対話と表現の研究所副代表理事。

「まちなかだれでも場づくりコース」では、多様な人が集まるコミュニティスペースとはどのような場か、それには何が必要なのかを、前橋のまちなかを舞台に考えてきた。

でも、なぜそもそも、そのような場について考える必要があるのか、と思う人もいるかもしれない。商店街が衰退しているから？ まちに元気がないから？ もちろん、それも理由としてあげられる。しかし、最も大きな理由をあげるとしたら、人には「私」として生きられる場が必要だから、ではないだろうか。「私」として生きるとはどういうことだろう？ 1つには、「この私として、そこに存在していることを認められること」といえるのではないかなと思う。

私が私らしくいられる場。のびのびと力を発揮できる場。一方で、無理にがんばらなくてもいい場。人にはそんな場がどこかで必要だが、実は意外と少ないのが現状だ。

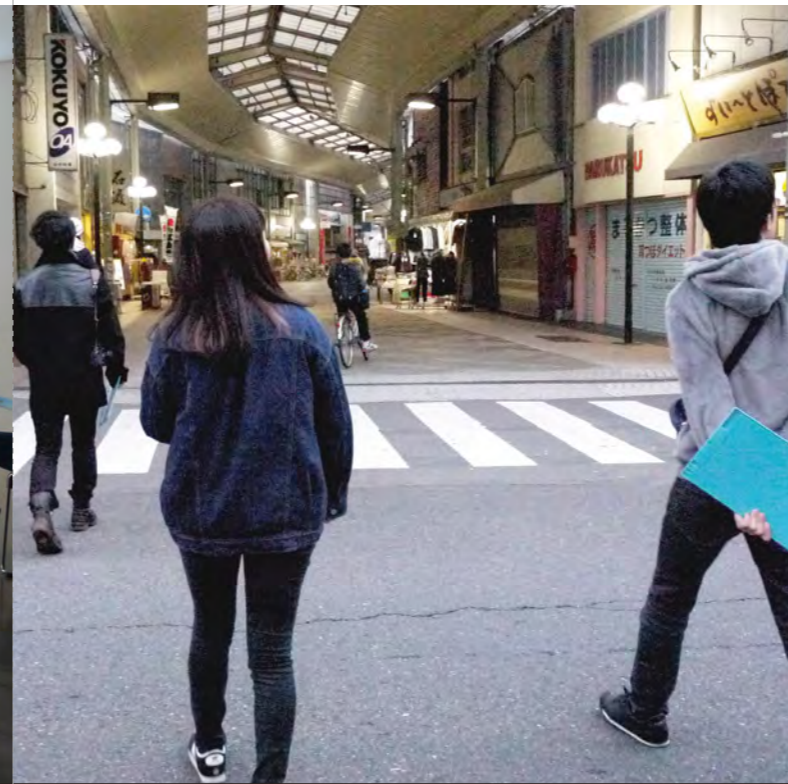
ゲストの方々は、まさに、さまざまな人が、その人として生き、活躍している場を見せてくださった。地域のコミュニティスペースや、アートプロジェクトの現場、美術館など舞台は異なるが、そこには人々が集い、楽しそうに活動している姿があった。

人は1人ではおそらく生きていけない。他者とともに、「私」として生きる場が必要なのだ。互いを排除せず、認め合い、一緒につくっていくコミュニティが、今後ますます重要になっていくように思う。それには、互いの言葉に耳を傾け、異なるものにきづき、違いから生まれるものに目を向ける。そんなことが重要だと思う。自分の可能性も、他者の可能性も、信じ、かけあわせ、さらなる可能性をひらいていく。そうした小さな実践を積み重ね、これからの暮らしをつくっていくのは、私たちひとり1人なのだと思う。今回の講座では、その小さな実践の種が、たくさん撒かれたように感じられた。



井尻 貴子 (いじり たかこ)

NPO法人多様性と境界に関する対話と表現の研究所事務局長。  
早稲田大学第一文学部（美術史）卒業、大阪大学大学院文学研究科（臨床哲学）博士前期課程修了。財団法人たんぼの家、公益財団法人東京都歴史文化財団東京文化発信プロジェクト室等を経て、現職。同時に、フリーランスとして主にアート、哲学に関わるプロジェクト等の企画、運営、コーディネート、記録編集などを行っている。共著書に、『哲学カフェのひらきかた』、『病院とアート—医療現場の再生と未来』など。

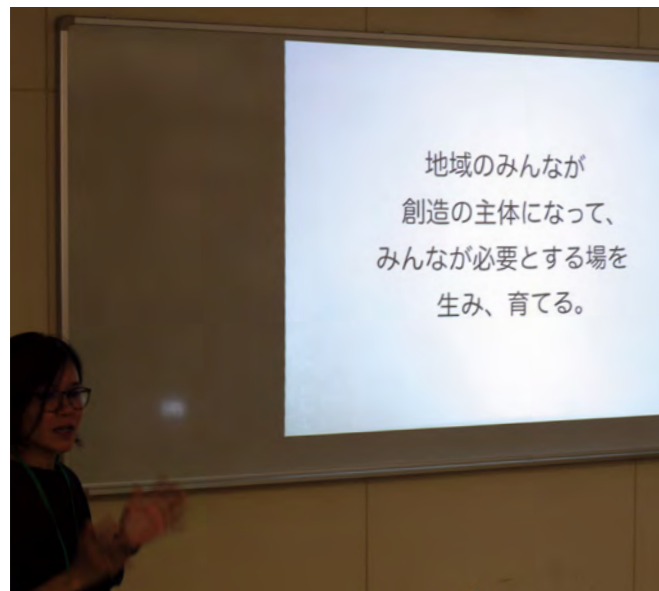




総合ディレクターの茂木からメッセージ。この講座への期待やまえばしアートスクール計画のねらいなど、これから始まる講座が楽しみに。



まちなかだれでも場づくりコースに来ると、多様な分野で活躍している方々からいろいろな情報を得られるのも魅力の1つ。



自分たちが考えたい内容のヒントがたくさん詰まったゲストのお話は、参加者のみならず毎回運営スタッフも楽しみにしていました。



参加者のみなさんの真剣なまなざし。前橋のまちなかにつくりたい場所とは？ 自分のやりたいことは？ 他のみなさんの想いとは？



前橋のまちなかの商店街にフィールドワークにも出かけました。お店の方と話を弾んで、楽しい会話の中から得られる情報は、さまざまな気づきをもたらしてくれます。



みんなの意見や考えをどんどん出し合います。自分とは違う意見も、視覚化して整理すると、さらに新しいアイデアへと発展していくこともしばしば。

## 対話ゼミ

3回の対話型講座。

多様な分野で場づくりに関わるゲスト2名を迎え、実践例のレクチャーをもとに受講者自身の活動する地域や前橋のまちなかについて、対話を通して考えていきました。

# 対話ゼミ1 Report

Date 6/25(Sat) Time 14:00~16:30 参加人数 27名

Theme まちでコミュニティスペースを運営する Place 前橋まちなか研究室

Guest 岩中可南子(SHIBAURA HOUSE) × 加藤亮子(芝の家)

まちなかでコミュニティスペースを運営するとは、どういうことなのでしょう？

対話ゼミ第1回目は、田町駅ををさんで反対に位置する2つのコミュニティスペース「SHIBAURA HOUSE」の岩中可南子さんと「芝の家」の加藤亮子さんをゲストに迎え、地域の幅広い世代の人が集まる場づくりについて伺いました。

対照的な外観をもつ2つの場所でありながら、共通して目指しているのは、地域の人が気軽に訪れ、それぞれが良い時間を過ごす場であること。また、人と人が出会い、交流が生まれる場であること。子どもからシニア世代までを対象として開催されるいろいろなプログラムやイベントも、すべてそこに向かってるように思います。

2人の話を聞いて感じるのは、人と人の距離が自然に近くなる空間を心がけているということです。何気ない関わりがそここで生まれる場所というのは、実はそんなに多くありません。それでいて1人で過ごすこともできる。それが内輪になりすぎない、居心地のよい空間をつくっているように感じます。そうしたコミュニティスペースは、いきなりできるものではありません。どちらも、最初はなかなか人が来なかったといいます。そこで、試行錯誤を積み重ねていくうちに、しだいに訪れる人が増え、ちょっとのぞいていく人が増えていく。人が人をよび、さらによい雰囲気になる。そうしたコミュニティスペースは、スタッフのみなさんや、そこで出会った人同士が、関わりをなかで育ててきた場であるように思いました。

## 出会いが生まれ、コミュニケーションがひろがる場。 岩中 可南子さん

SHIBAURA HOUSEは、東京都港区芝浦にあるコミュニティスペースです。運営しているのは広告製版社。1952年に創業し、50年以上芝浦にて広告の製版業を営んできました。2011年、社屋の建て替えを機に今のようなかたちになりました。

芝浦は、かつては倉庫街、その後はオフィス街であり、働くためのエリアでした。でも最近では次々とマンションが建設され、若いファミリー層が暮らし始めています。そのため、数万人の人間が密集しているながら、交流がないという課題があります。行政ではなく民間の立場から盛り上げていくことはできないか。オフィスとしてだけでなく、地域の人々も一緒に利用できる家のような空間にしたいと考えたのが、SHIBAURA HOUSEを始めた目的です。

建物が特徴的で、全部で7つある階層はガラス張り。内部の活動が外から見えるようにデザインされています。設計は建築家・妹島和世氏(SANAA)が手掛けました。

この建物の1・2階を、フリースペースとして運営しています。登録不要、使用料無料で、誰でも自由に使える空間です。近所の社員がお昼ご飯を食べに来たり、キッズスペースもあるので子どもが来たり、近所のおじいちゃん、おばあちゃんが来たり、いろいろな世代に使われています。

また、年間約200件のイベントを行っています。内容は幅広く、中心は日常的なものや、英会話教室「ランチ・タイム・イングリッシュ」、赤ちゃんと一緒に参加できるヨガ教室「ママ元気！ヨガの時間」などや、建築やアートに関連しているもの。海外のクリエイターやデザイナーを呼び、活動を紹介するというものです。

また、フレンドシッププログラムとして、年間を通し一緒にやっていく企画を毎年実施しています。これはプログラムの幅を広げると同時に新たなネットワーク形成にもつながっています。

2015年からは、「エクステンジ」と「ローカリストオフィス」が始まりました。「エクステンジ」では芝浦に縁のある人が先生になってワークショップを行います。その参加費をお金で支払うのではなく、先生が挙げる欲しいものリストから持ってきてもらうという仕組みにしています。ものだけではなく、スキルを交換することもあります。「ローカリストオフィス」はフリースペースの運営を地域の方々に任せる取り組みです。主な仕事は掃除やカフェの対応ですが、少しずつイベントの企画やプログラムも考えてもらっています。

いろいろなことをやっているの、つかみどころがないと言われることもあります。その人なりにSHIBAURA HOUSEを使ってもらいたいと思っています。ここを拠点に、普段は出会わない人との出会いが生まれ、コミュニケーションが広がってほしいと考えています。



岩中 可南子(いわなか かなこ)さん

SHIBAURA HOUSE(運営:株式会社広告製版社)プログラムディレクター。東京都葛飾区生まれ。早稲田大学大学院文学研究科美術史専攻修了。美術系出版社、美術大学の職員を経て、2012年からSHIBAURA HOUSEにてプログラムの企画、スペース運営、広報を担当。

## 無目的に集まれる、屋根がある公園のような場所。 加藤 亮子さん

芝の家は東京都港区芝にある、地域の交流拠点です。芝地区は、昔から住んでいる人が多くいる一方、タワーマンションができ、新しく住む人も増えています。でも、両者に交流が少ない。そんななか、人のつながりを取り戻そうという目的で2008年10月に開設されました。港区と慶應義塾大学の連携のもと運営されています。誰かとおしゃべりしたくて来る人、休憩しに来る人、宿題を持って来る小学生、イベントの参加者など、いろいろな人が集まります。0歳から上は何歳まででも、幅広い年代が同居しています。屋根がある公園のような場所です。建物は家のような雰囲気、靴を脱いで上がってもらいます。ちゃぶ台やソファがあり、駄菓子販売コーナー、喫茶スペース、おもちゃで遊ぶスペース、小さなキッチンもあります。

週に5日、日中にオープンしています。平均すると1日に38人、何もない日は20~30人くらい、イベント時は50人くらいの方が訪れます。日々の運営は事務局職員3人とボランティアスタッフで行っています。ボランティアスタッフも20代から70代まで幅広い年代の人たちがいます。日ごとの当番制とし、それぞれのペースで関わられるようにしています。さらに、イベントの企画運営で関わっている人もいます。例えばオープン以来続けている「レコードコンサート」はJAZZファンの町内会長さんの発案。収集されているレコードを聴きながら曲の解説をしてくれるイベントで、普段は女性の来場者が多いのですが、このときは圧倒的に男性が多いです。他にも、子どもたちと一緒に過ごそう「おやつづくり」や、夜ご飯会「よるしば」、子どもも大人も一緒にのんびり楽しむ「手しごとの時間」、ボランティアスタッフの特技を活かした「アロマハンドマッサージの会」などといったイベントを定期的に開催しています。

最初は、芝の家って何？という人が多かったのですが、2011年の震災後から無目的に人が集まれる場所も必要だということが、社会的にも認知されてきたように思います。こういう居場所も増えてきて、今では、こって何ですか？と聞かれることは少なくなりました。特別に企画

をしなくても自然発生的なイベントが、場所があるということ、顔なじみの人がいるということで起きやすくなってきて感じています。日々の場づくりをしている事務局職員やボランティアスタッフは、来た人の話を聞いたり、初めて来た人が戸惑っているときに話しかけてみたりといったことをしています。自分らしくいられる雰囲気づくりが大切だと考え、場を整える人がいることで、居心地の良さを感じる人が増えるといいなと思い、運営しています。



加藤 亮子(かとう あきこ)さん

地域をつなぐ！交流の場づくりプロジェクト(芝の家・ご近所ラボ新橋)事務局長、三田の家有限責任事業組合職員、慶應義塾大学総合政策学部および文学部哲学科美術史学専攻卒業。広島生まれ、神戸・北京・東京にて育つ。大学卒業後、幼稚園、障害児通園施設など、教育・保育の現場で10年間子どもの生活に関わる活動に従事。その後東京国立博物館博物館教育課にて生涯学習ボランティアコーディネーションに関わる業務に従事後、現在に至る。



・自分の活動と照らし合わせて感じたのは地域への浸透力の違いです。それは対象世代の幅の広さです。どちらも子どもや親が安心して利用できる風景が印象的で、またその子どもたちをやさしく見守るお年寄りも素敵でした。

・生きていくということは人と人のつながりなくしては成り立ちませんが、そういったバランスをうまくできる人もいれば、できない人もいて、圧倒的に苦手な人が現代には多くなってしまったのだなという思いと、若い人ばかりの問題ではないのだとハッとしました。

# 対話ゼミ2 Report

Date 7/9(Sat) Time 14:00~16:30 参加人数 37名

Theme 地域の人の力を活かしたアート活動 Place アーツ前橋 スタジオ

Guest 吉川由美(アートディレクター、演出家) × 小山田徹(美術家、京都市立芸術大学)

地域の人の力を活かしたアート活動とは、どのようなものでしょうか？

2回目のゲストは、アートディレクター・演出家の吉川由美さんと、美術家・京都市立芸術大学教授の小山田徹さん。それぞれ、東日本大震災後の東北でもプロジェクトを展開されています。さまざまな場所で、現地に暮らす人と関わりながらプロジェクトを行う2人に話を伺いました。

吉川さんは、「きりこプロジェクト」の事例を中心に、たくさんの写真を交えながら、地域の人の力についてお話くださいました。そのなかで印象に残ったのは、「地域の人の力を活かす」なんて

外から言うのは、おこがましいんじゃないか、という言葉。

小山田さんも、ご自身のこれまでの活動を振り返りながら、「獲得感」、つまり、何かをさせられるのではなく、何かをしていくことが大事だと言っていました。

2人に共通しているのは、その人の力が活きる状況をつくっていくという点。やらされて動くというのではなく、したくなって動くことが可能となる場をつくるという点にあるように思います。そうした場では、関わる人々によって、次々と新たな展開が生まれていきます。そういう意味でそれは、未来が生まれる場所をつくる試みなのかもしれません。

## 共通の視座をつくり出し、新たな価値を発見する。 吉川 由美さん

2011年3月11日、東日本大震災。

5分の間に多くの人やものがなくなりました。美しい景色、初恋の思い出、家族との日々……。忘れるから幸せなこともあります。昔からの風習や生業など、忘れてはいけない、失ってはいけないものもあります。

南三陸きりこプロジェクトを震災前の2010年からおこなっています。きりことは、南三陸の神社が氏子たちのために半紙でつくる神棚飾りのことです。きりこプロジェクトはその風習をもとに、まちの人たちの宝物や思い出などを切り紙で表し、それぞれの軒先に飾るアートプロジェクトとして行いました。きりこに普通の人の暮らしを刻むことで、暮らしのドラマを共有することができます。隠れていた、それぞれの家、一軒一軒のドラマが見えてくるんです。

津波によってすべてが流されてしまった後、土地の所有者に許可を得て、きりこを看板にして飾りました。生き残った人々の想いを亡くなった人にも届けようと考え、海にむけて掲げました。

毎夏、きりこを刻むワークショップを続けています。あるとき、津波で両親を亡くした女性が参加し、思い出を刻みました。そのきりこを見た人が、彼女の両親との思い出を語る。

誰かが、亡くなった両親を思い出してくれていることを知り、嬉しさで涙する。

きりこによって、誰かが自分が生きていることを見てくれている、そんな実感を得ることがあるように思います。

地域の人たちの力を活かすとは、みんなに無理に力を出させることではありません。日常を、普通に生きていることを他者が見てくれて、認めてくれる、讃えてくれる、そういう場があると力が膨らんでくるのではないのでしょうか。アート活動の得意技は、きりこや写真などで地域の共通の視座をつくり出し、地域ならではの宝物や新たな価値を発見、共有することにあると思います。なぜなら、芸術とは他者を理解する行為で、他者の問題を自分の問題として受け止める



吉川 由美 (よしかわ ゆみ)さん

宮城県仙台市生まれ。アートディレクター、演出家。コミュニティと文化芸術、観光、教育、医療、福祉などの分野をつなぎ、アートの方で地域の力を引き出す活動をしている。東日本大震災で甚大な被害を受けた宮城県南三陸町で、町の復興に向けて、さまざまなアートプロジェクトを展開。同町における「きりこプロジェクト」は2013年度ティアニー財団賞受賞。(有)ダ・ハ プランニング・ワーク代表取締役、ENVISH代表、八戸ポータルミュージアムはっち文化創造アドバイザー。東北芸術工科大学大学院非常勤講師。

## 「共有空間の獲得」がさまざまな問題の解決につながる。 小山田 徹さん

「共有空間の獲得」をテーマに活動しています。共有空間とはいろいろな人々が、他者と時間や空間、できごと、記憶、場所などを共有することです。

もともと「ダムタイプ」というパフォーマンスグループに創設から関わっていました。活動のピーク時に中心メンバーの1人がエイズを発症しました。当時(1980年代の終わり頃)は、エイズに関する知識がなく、どうしたらいいかわからない状態でした。あれこれ考えるなかで、エイズは治せないが、さまざまな社会的差別の問題を解決しようと、考え、行政に掛け合ったり、デモをしたりといった活動をしました。しかし専門的な知識が増えてくると、後から参加する人には敷居が高くなる。問題の解決を目的とすると、他者に対して優しくなくなる。1つの答えを他者に押しつけるかたちになってしまうことに気がつき、1回立ち止まりました。そこで、そういう問題を常に考え、共有していく空間を獲得することが、さまざまな問題を持続的に解決する手法なのではないかと考えついたんです。

そうして始めたのがWeekend Cafe(ウィークエンドカフェ)です。京都市立芸術大学近くの場所を借りて、週末限定でオールナイトのカフェを運営しました。カフェといっても、ホームパーティーの延長で、サービスはありません。それが、人が人を連れてくるかたちで広まり、毎回300人くらいの人が集まり、いろいろな話をする場となりました。まだ携帯がない時代でしたね。この企画は、会場が歴史的建造物に指定されたため使えなくなってしまい、クローズしました。

その後、見つけた別の場所で、Bazaar Cafe(バザールカフェ)を始めました。ここはお店をつくるときからいろいろな人を巻き込む工夫をしました。手伝いの人がたくさんいたため、わざと手間のかかる仕事をつくることで個々に合った参加の仕方を可能にしたんですね。そうすると、できたときにはすでにみんなの場所になっているわけです。

こうしたことが面白くなり、いろいろな場所をつくりはじめました。仕事にはなりませんが、自分にとって、社会にとって、便利な場所ができるというご褒美がありました。

獲得感を一番感じやすいものは、たき火です。たき火をすると勝手にいろいろなことが起こります。たとえば、料理を始める人がいたり、それをシェアする人がいたり。火さえあれば、他に何も企画が要らない。人が自律的に動くことができます。

宮城県の女川町は震災時、たき火で生き延びた場所ですが、仮設住宅での生活が始まったとたんに、火気厳禁になってしまった。それまでは、グラウンドでするたき火の周りに人が集まり、会議をしていました。もう一度たき火を復活させたいと思い、女川常夜灯「迎え火プロジェクト」を毎年8月13日に行っています。新しい風習として今後100年間続けていきたい。こどもたちは震災のことを忘れていきますが、たき火をすることによって、そのことを話す機会を毎年持ち続けていきたいと考えています。



小山田 徹 (こやまだ とおる)さん

美術家。1961年鹿児島県生まれ。京都市立芸術大学日本画科卒業。98年までパフォーマンスグループ「ダムタイプ」で舞台美術と舞台監督を担当。平行して「風景収集狂舎」の名で様々なコミュニティ、共有空間の開発を行ない現在に至る。2009年より、京都市立芸術大学で彫刻の教員を務める。現在、京都市立芸術大学美術学部教授。大震災以降の女川での活動を元に出来た「対話工房」のメンバーでもある。



・小山田さんが「家庭にいる人は、この講座にすごく調整して来てくれていて」と言ってくれて、すごうれしかった。その通りだし、そのことをアートプロジェクトをしている人が理解してくれているのだなあと。スタッフや講師がこどもを連れてやっているのはとてもポイントだと思っています。

・専門性を高めていくとハードルが高くなる。理念を持ちながらそれをどんな風に崩したり、ずらしてたりしていくと多様性の可能性が広がっていくのか。



# 対話ゼミ3 Report

Date 7/23(Sat) Time 14:00~16:30 参加人数 29名  
Theme まちなかの多様な「働く」を考える Place 前橋まちなか研究室  
Guest 国保祥子(静岡県立大学経営情報学部講師) × 井上拓磨(HanaLab.代表)

まちなかで、多様な働き方を可能にするには、どうしたらいいのでしょうか？

3回目は、女性の働き方に関する事業に取り組む2人をゲストに迎え、話を伺いました。

近年、女性が仕事を続けることの難しさが指摘されています。出産や育児といったライフイベントにより、働き方の変更を余儀なくされるばかりか、外で働くということから遠ざからざるを得ない状況が生まれています。そうした状況はなぜ起こるのか。国保祥子さんは、問題解決のアプローチを具体的に展開し、こどもか仕事か、どちらかを諦めなくてもよい社会づくりに取り組んでいます。

また、井上拓磨さんは、女性が子育てをしながらスキルアップできる仕組みをつくり、人や社会とつながる機会をつくろうとしています。

こうした問題は、国保さんが指摘するように、実は女性だけの問題ではありません。人は誰でも、病気や怪我で長時間労働ができなくなる可能性がありますし、年齢を重ねるなかで働き方を変えたい、あるいは変えざるを得ないと思うこともあるでしょう。そうしたとき、多様な働き方を認め合い、支援しあう仕事環境があるということは、とても重要です。働く環境をつくること。それは、より良い社会、より良い暮らしをつくりだすことにほかならないのではないのでしょうか。

## 「こどももキャリアも」を、当たり前にする試み。 国保 祥子さん

2年前にこどもが生まれ、自分を取り巻く環境が変わりました。自分が当事者になったときに企業から見た女性、女性から見た企業とのギャップについて、初めて理解できたように思います。今日は、女性が働くことに関する日本の問題についてお話しします。もちろん、ある価値観を押しつけるつもりはありません。私は、多様な生き方を選択できる社会をつくりたいと考えています。働くことを諦めしてしまう状況を防ぎたいのです。

私は仕事がすごく好きで、以前は夜10時まで平気で働いていましたが、今はどこにいても17時には終えます。この労働時間の減少をどう補うか考え、働き方や仕事を受けるスタンスを変えることを試みました。結果、仕事が減るかと思いましたが、逆に増えたんですね。やり方次第で対応可能であることがわかり、メリハリがついて、仕事も子育ても楽しめるようになりました。

でも今の日本社会では、こどもがいると仕事を続けられないという現象が起きてしまっています。問題は山積みですが、その分析をするときに大事なのは、問題の構造を把握することだと考えています。それが何故起きているのか、構造がどうなっているかの研究をしています。日本の女性の半分以上が、出産を機に正規社員を辞めています。何故、辞めてしまうのか。最大の理由は労働時間です。仕事を続けたいと思う人は、出産後の方が割合は高いです。けれど、育児と両立できる働き方がないんですね。こどもの成長に合わせて働きたい。理想は残業なしのフルタイムや在宅勤務。でも現実的に17時に帰ろうと思ったらパートやアルバイトしかない。あるいは働かないという選択になってしまう。子育て中の女性だけの問題ではありません。この先、高齢社会で労働力が減ってきます。残業ができない人を前提に働く場をつくっていかないと、日本そのものが危ういと感じています。

私は、1つの解決策として、育児期間を両立ライフへの移行期間として捉える、という提案をしています。こども連れで参加できる経営の勉強会「育休ブチMBA勉強会」を開催し、学びのコミュニティを

つくっています。ディスカッションを中心にし、理論だけではなく、具体的な実践力を伸ばし、鍛えていく。勉強をすることで昇進意欲がわきます。日本の特殊性として、女性の管理職が少ないことが挙げられます。つまり、意思決定側にいないということ。何故いないのか。企業の主張は、女性の仕事に対する意識が低いから。昇進の話が断ってしまう女性が多いというのです。それは女性に自信がないからなんですね。管理職というと、スーパーマンにならないといけない気がしてしまう。そうではなく、組織の体制を変えるチャンスを得ることができると捉えたらどうか。じゃあやってみようかなと思う人はいるはず。キャリア意識の違いは、社会変革につながります。世の中の当たり前を変えること。「こどもかキャリアか」ではなく、「こどももキャリアも」を当たり前にしたい。そのためにこどもとキャリアを両立しているロールモデルを増やしていきたいと考えています。



国保 祥子 (こくほ さちこ)さん

経営学博士。静岡県立大学経営情報学部講師、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科非常勤講師。株式会社ワークシフト研究所所長。専門は組織マネジメント。外資系企業での勤務を経て、慶應ビジネススクールでMBAおよび博士号を取得。2011年に地域の社会人と学生が共に課題を検討する「フューチャーセンター」を、2014年に育児休業期間を能力開発の機会にする「育休ブチMBA勉強会」を立ち上げる。2015年には企業や官公庁の組織開発プログラムやコンサルティングを手掛ける株式会社ワークシフト研究所を共同設立。

## 女性と社会をつなげるコワーキングスペース。 井上 拓磨さん

コワーキングスペースHanaLab.を長野県上田市で3店舗運営しています。僕は、上田出身ではなく名古屋生まれです。結婚を機に会社を辞め、妻の実家の長野県上田市に移住しました。以前からまちの活性化に特に興味があったわけではなく、自分が上田で楽しく暮らすために活動を始め、2012年に長野県で初のコワーキングスペースHanaLab.TOKIDAを開設しました。HanaLab.TOKIDAであるとき、1人のお母さんと雑談をしていて、「子育て中の女性に優しい施設があったらいいですね」という話ができました。それで、女性が働きやすいコワーキングスペースHanaLab.UNNOを立ち上げたんです。施設をつくりコミュニティを育てていくためには、リスクが高く覚悟もいりますが、0→1を生み出すということは面白いのかなと思います。

HanaLab.は単なる仕事場というよりも、人と人、人と組織、組織と組織を柔軟に結びつける場として考えています。コワーキングスペースを核にいろいろな人たちが集まる場をつくるという考えです。起業など、新しいチャレンジが増えないと雇用は増えません。それに加え、人口オーナス期においては優秀な働き手をどう育成・確保していくのがとても重要です。以前は商品戦略だけやっていれば良かったですが、今は人材戦略をどうやっていくかに重点が変わってきています。

今までは必要な能力を持った人を探せば良かったですが、今後は人を育てて事業に活かすノウハウが重要です。そして、子育て中の女性に優秀な人材が眠っていることは間違いありません。HanaLab.UNNOは、1階に主にお母さんたちが集うところとしての女性のためのワーキングスペース、2階に託児所とシェアオフィス(女性男性関係なし)があります。お母さんをいかに育成していくか、業務以外に勉強会をしたり、目標を発表したり、クラウドファンディングをやってみたり。自分たちもやったことがないので試行錯誤しながらお母さんたちと一緒に作り上げています。だからといって、

女性だけのコミュニティをつくらうとしているのではなく、女性と社会をつなげることが目標です。そのため、企業から仕事を請け負い、女性たちに発注する仕組みをつくっています。そこで仕事をしながら経験を身につけ学んでいき、いずれこどもの手が離れる段階で企業に戻し、企業の生産性を上げていけば、いい地域になるのではないかと考えています。

女性の支援も創業支援もですが、誰かが何かを教えるのではなく、コミュニティのなかで解決されていく相互支援を自分たちは目指しています。

地域には多様性が必要です。地方で暮らしていると、幼い頃は自然に囲まれているので良いのですが、自我が目覚めてきたときに見本となる人が少ないように思います。親たちの多様性が少ないということは、こどもの多様性も少ない。可能性が狭まってしまいう状況が生まれがちですが、こどもたちにとってたくさんの選択肢を感じられる地域であつたらいいなと思います。自分が欲しい地域を求めて行動している結果、地域活性にもつながっているように感じています。



井上 拓磨 (いのうえ たくま)さん

コワーキングスペースHanaLab.代表・地域活性化伝道師。1980年生まれ。愛知県名古屋出身。信州大学大学院修了後、大日本印刷株式会社を経てフリーランスに。フリーランス時代に地域で働くことの課題を感じ、異業種コミュニティ「ループサンパチ」、コワーキングスペース「HanaLab.」を立ち上げるなど、地方の働き方の変革をテーマとして活動。創業支援や実践型のインターンシップを通して、若者がチャレンジできる環境づくりに取り組んでいる。



・「多様性」というキーワードと「(ひとり1人が自立しつつ)相互に支援しあう」という考え方はとても心に響きました。  
・自分の将来のビジョンを見直すきっかけになりました。また、今まで仕事とプライベートの境界ははっきりと分けたい、分けるものだと考えていましたが、それ以外の可能性を感じました。  
・来年から社会人になります。将来のことを考えると、多様な働き方ができて、それを認めてくれる風土があるといいなと思いました。

・「働く」ということ=「労働」だけではないということを改めて感じました。楽しく、やりがいを感じ、人や世の中のために、新しい価値観を生み出す。理想論に終わらせるだけではなく、実践されている方々のお話を聞いたことが刺激になりました。「キャリアの中断」ということに関してコンプレックスを感じていましたが、自分らしい方法を模索することを続けていこうと思いました。



全事業の総合ディレクターと、Bコースのコーディネーター。毎回、リラックスした雰囲気をつくり出していたのは、実はこの2人だったような気がします。



前橋に置き換えると、自分に置き換えると、それはどうということなんだろう。サークルになっての対話の時間はいろいろな質問が飛び交いました。



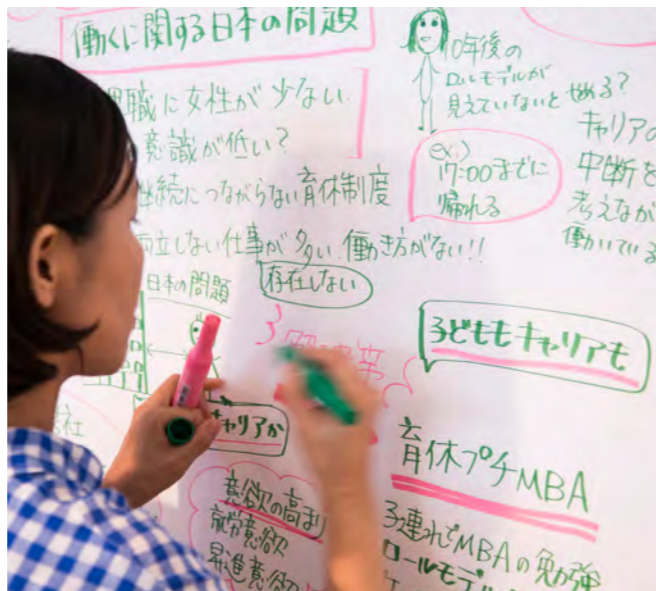
小さな子どもを連れてお母さんも参加していたのが、この講座の特徴。対話のサークルに自然と混ざり合っていて、インクルーブな場となっていました。



ゲストの話が笑いを誘う場面も多く、講座は和やかな雰囲気で行われていきました。話題が身近に感じられ、前橋ではどうなのだろうと考えるヒントに。



ゲストは各回のキーワードに沿って、実践例をもとにお話してくださいました。多様な分野の方々に来ていただいたので、内容は多岐に渡りました。



対話ゼミでは、グラフィックレコーディングで記録を取っていました。話したことを後から視覚的にシェアすることで、新しく気づくこともたくさんありました。

## 実践ゼミ

4回の実践型講座。  
 レクチャーとワークを通して考え、  
 自分のやりたいことの具体的なアイデアを  
 模索していきました。  
 毎回「まちなかの場づくり」を考えるためのテーマを設定。  
 各テーマに明るいゲストを招き、  
 その視点をフックにしてみんなで深く考えていきました。  
 まちなかへフィールドワークにも出かけていき、  
 前橋の“ひと・場所・もの”をリサーチ。  
 「前橋」と「私」を軸に広がる場づくりを考えました。

# 実践ゼミ1 Report

実践ゼミ1回目は、慶應義塾大学経済学部教授の武山政直さんをゲストに迎え、サービスデザインの理論をもとに、「自分の考えるコミュニティスペースとはどんなものなのか」ということを考える始める講座となりました。まずは全体講師の坂倉さんから前橋の状況と講座の説明。実践ゼミは、レクチャーとワークショップから『さまざまな参加のかたちを考える：担い手コミュニティの形成』と、『自分たちに必要な拠点を考える：ユーザー参加者のデザイン』を考えていく講座であることを共有しました。前橋というまちは、アーツ前橋や前橋プラザ元気21に見られるように、中心市街地の空洞化した商業施設の再利用をすることで、地域連携型文化拠点として活用しています。また、前橋〇〇

特区45Days、前橋ビジョン発表会など特徴的な動きもいくつか生まれています。さらにその動きを市がバックアップしています。そうした前橋のまちの状況や特徴をみんなで共有しました。武山さんのレクチャーでは、まずサービスデザインについて解説していただきました。コミュニティスペースをつくる上で、ユーザーや課題、その解決方法をどうしているのか？「参加型」のサービスとは？などといった問いを立てて、サービスについて考察しました。ワークショップでは、まちなかの空き物件を見学し、自分たちならどのような活用ができるかをブロックを使って発表しました。

## サービスの本質は、「人のため」に何かすること。 武山 政直さん

サービスデザインは平たく言うと、サービスってどうやっていけばいいのかということです。サービスという言葉の語源はラテン語で、奴隷：主人に強制的にやられるという意味でした。その後、サーバントとか、召使い、使用人に変化しました。続いて職業として、サービス業は広がっていったのですが、主人に尽くすという点は引き継がれています。

今や、人がいなくてもサービスができたり、企業とか専門家でもサービスの担い手になったりしています。それを可能にしたのが、インターネットの普及です。

変わらないサービスの本質は、「人のため」に何かすること。人間はこれがなくては生活できません。サービスなくして人は生きられない。

身近なところにサービスはたくさんあります。これを実現するために道具や必要なものを取り揃えなくてはなりません。1つ1つがそれを与えてくれるものであり、意識されませんが背後にはたくさんのサービスを組み合わせて生活しています。逆もまたしかり。

力を組み合わせていくことで大きな仕事ができたりします。サービスの組み合わせがうまく回るようになると社会はいい方向へ向かいますね。スキルの足りないところを補い合い、サービスを交換していくことが大切です。

コミュニケーションの手段として、インターネットを使うことでサービスの交換が容易になります。また、お金が介入することでスムーズになっていくという、お金の流れも重要です。

というわけでサービスデザインとは何か？『誰かが持っている力の組み合わせや交換がおこなわれる仕組みをつくっていくこと』です。

では、どうやってつくっていくのか、大きく分けて2つあります。

1つめは、まず機会を探ること。企業がよくやっているのは、既存のサービスの前提を疑うことです。そうすると、もっとこうしたらいいという点が見つかる。

今までは、とにかくいいものを生み出してお客さんに提供するという考え方で進められてきました。今は、企業が生み出したものが、お客

さんのやりたいことの達成にどう役立つかが問われます。利用者のやりたい世界は何なのか、ここに新しい課題が見えますね。

協力する人たちの世界はどう成り立っているのか、どの人とどの人が協力すればいいのか、自分の立ち位置は？と考えていくことで新しいサービスの機会を考えられるのではないのでしょうか。

サービスを使う人の利用体験・サービス提供の仕組み・事業の取り組み。これらを行ったり来たりしながら考えるといいと思います。このとき、利用者側と体験者側の需要の異なりに注意することが重要です。2つめは、サービスのデリバリーなど接点ごとに考えること。俯瞰して見ることです。

ステークホルダーの関係性を示すマップも有効です。この分野にはこのような人が欲しいとか。いろいろアイデアを出していくわけです。それを模造紙やブロックなんかで可視化していく。こうすることで、お互いがある1つのものごとに対し、どのように考えているの共有することができます。

サービスデザインのプロセスは発見>定義>発想>実現のイメージです。サービスに関わる人みんなで見えながらやっていくことが一般的になされていることです。

どんなサービスを何のためにつくるかを考えるうちに、自分の能力に気づけていけるのがサービスデザインです。



武山 政直 (たけやま まさなお)さん

慶應義塾大学経済学部卒業。2008年より同教授。都市メディア論、マーケティング論を背景に、ICTを活用したサービスデザインの研究に従事。企業と顧客の価値共創 プラットフォームの構築、ストーリーテリングを応用した参加型サービス・プロトタイプング、サービス・イノベーション手法の開発等を対象に、企業や自治体と実践的な産学共同プロジェクトを推進中。代表的著作に、『サービス・スタートアップ・イノベーションを加速するサービスデザインのアプローチ』(訳書)ほか。

Date 9/11(Sun) Time 13:00~18:00 参加人数 14名

Theme 武山政直さんと考える、使う人がつくる場所 Place 前橋プラザ元気21 503学習室

Guest 武山 政直 (慶應義塾大学経済学部教授)



ファシリテーターが、ワークショップの内容やねらいを説明。まちなかでどういふ場づくりをしたいか、みなさんと一緒に考えていきます。



まちなかの空き物件をみんなでリサーチ。道で話していると隣の八百屋や、近くの洋品店の店主が出てきて、いろいろと教えてくれました。



フィールドワークのあとは、自分たちがまちなかでつくりたい場所はどんなところかをブロックでつくります。手を動かしながらつくっていくと、自然と対話も深まっています。

## 参加者のことば～振り返りシートより～

【今日ゼミに参加して、まちなかで自分がやりたいなと思ったこと】

- ・ポップアップ(期間限定)で実験的なサービスを試すスペースをまちなかに設けたい。
- ・学生、若者のスタートアップ。支援/出合いの場づくり。
- ・ユーザーの声が聴きたい。
- ・老若男女が交流できる場をつくる。
- ・大学生が他の世代を巻き込んでチャレンジできる場所。
- ・障害の有無、人種関係なくテーマに沿ったものづくり、販売、展示。
- ・期間限定で古着販売、カフェ、散歩デートができること。
- ・学生がInstagramに投稿するような話題性があるオシャレな場所(学生中心)。
- ・交流の場というより、交流することで生まれる本来の生きやすさを思い出せるような場所。



ゲストの武山さんもワークショップに参加して、場づくりについて一緒に考えました。サービスデザインの視点から見ると、どんなことが前橋で起こせそうなのでしょう。



建物だけではなく、その周りの敷地も実際に見てみるとイメージがどんどん沸いてきます。こんな企画ができるかも。こんな人なら、こう使うのではという具体的な例も。



グループごとにつくりたい場所を発表。もっとまちなかのことを知りたい!という要望も出てきました。

【講座に参加して印象的だったこと】

- ・前橋で取り組んだことが日本の他の地域でも活かせるので、先進事例(失敗もOK)ができること良い。
- ・実際に拠点例を見ることでグループの関係がスムーズになった。
- ・迷惑なお爺さんに対して、見捨てる/解放の2つの意見が混在したこと。
- ・まちなかの空洞化をみんな問題視している。
- ・武山さんのお話からワークショップの流れが実践的だった。
- ・サービスの意味について改めて考えるきっかけになった。

# 実践ゼミ2 Report

2回目は、ゲストの遠藤幹子さんのレクチャーから始まりました。遠藤さんが、にしがも創造舎のコミュニティカフェづくりやザンビアでのマタニティハウス建設など、参加者と一緒に「つくる」ことでアートや場づくりを自分ごとに行っている取り組みは、前橋の場づくりにも当てはまるのでは?と思いました。この日は、実際にまちなかのイベント「前橋スマイルキャンパス2016」へフィールドワークに出かけ、参加していた子どもや大人に取材しました。おもちゃ屋さんなど、まちなかで働く人の意見も聞くことができました。取材から導かれたのは、これまで前橋のまちなかにあまり足を

向けなかったような人がユーザーなのではないか?ということでした。また、前橋まちなかエージェンシーの橋本薫さんに「めぶく」プロジェクトについて話を伺いました。行政+企業+市民が1つになって取り組んでいるもので、今後米国ポートランドの超人気パスタ店が前橋に日本第1号店をオープンしたり、旧白井屋ホテルをリノベーションしたりすること。前橋全体を底上げするような活動が、2年後には目に見えるかたちで動き出すというお話にみんなでワクワクしました。

## 『みんなでつくる』ことで自分の場所になる、自分のことになる。 遠藤 幹子さん

建築家です。2013年からマザー・アーキテクチャを設立して、場づくり、コミュニティデザインのお手伝いをしています。今日は、「地域のみんなが創造の主体になって、みんなが必要とする場を自分たちで生んで、自分たちで育てる」というテーマでお話したいなと思っています。

東京藝術大学卒業後、オランダへ建築の勉強をしに行きました。オランダでは仕事の際、予算や条件より先に、あなたのアイデアを見せて!と言われました。遊具のデザインを例にとると、日本なら「危ない」という意見が先に出るのに、面白いものは実現しようとしてくれるし、お金もどうにかしようとしてくれます。そんななかで自分のアイデアが採用されて保育園の遊具の改良をしようとした矢先、ビザの関係で泣く泣く帰国しました。

帰国後、日本の公園がオランダと比べるととても貧しいのが悲しくて、自分のアイデアを発表し続けていたら、嘘が真になり、公園のデザインを依頼されるようになりました。

プレイパークでは、視覚的にきれいでパッと目を引くような遊具を置いておくと、人が集まる。そうすると他のことも動き出す。持ち運びでき、簡単に組み立てられるプレイリヤカーという遊具のデザインをし、プレイリヤカーの日ができたり、小学校で段ボール迷路をつくったりしていました。そうしたら、だんだんクライアントさんから、そういう場をつくってほしいと仕事をもらうようになってきたんですね。

遊びと学びの空間のデザインを依頼されるようになって、地域で身につけたスキルを使い、箱根彫刻の森美術館では、参加型アートインスタレーション(2007)を企画しました。みんなが楽しく迷路に落書きをする企画で、1番高い4メートルくらいのところに大人が子どもを肩車して絵を描いてたり、大人も子どもと一緒に童心にかえって遊んだりしていました。ここで活動すると大きなものがどんどん生まれていくので、みんなでつくった場っていうのはすごい力になると気づきました。制作時に特に気をつけていることは、普段できないことが

できる空間、非日常的な物語性を空間にもたせるということ。その後、にしがも創造舎の「カモカフェ」をお金のない中、廃棄するペンキをもらい、外に落ちている葉っぱを使ってワークショップをしながら、使う人たちみんなの手で空間をつくることをしました。それは今アフリカでやっていることに通じてます。ザンビアで使用済みコンテナを再利用して、マタニティハウスをつくっているのですが、文字が読めない人でも分かるように、外壁に大きなイラストを描いたり、ピクトグラムを考えるワークショップをしたりして、みんなでつくっています。みんなで壁に描いたり、アフリカの人たちの文化に合う歌と踊りを盛り込みながら一緒につくったことで、自分ごとになり、この場に対する主体性や責任感がすごく育まれて、みんなもう、いつもなんとかしようと思ってくださるんですね。そうすると、とても大切にその場を扱うようになっていきます。参加型にすることのメリットはすごく大きいと思います。得意な人とうまく協力して、みんなで完成させられたことが、チームとしての成功体験になったようです。じゃあこれから運営をどうするかとか、もっと人を呼ぶにはどうするかっていうときに、あのときみんなで協力してつくり上げたから、これからもぼくたちでできると言うって言うてくれたので、場をつくるって、そういう結束という意味でも効果があるのかな、と思いました。



**遠藤 幹子** (えんどう みきこ)さん  
一般社団法人マザー・アーキテクチャ代表  
理事、office mikiko 一級建築士事務所代  
表。専門は創造力を育む空間デザイン、住民  
参加型のコミュニティデザイン。東京生まれ。  
東京藝術大学建築学科修了。Berlage  
Institute(オランダ)建築大学院修了。一級  
建築士。共著に、『ゼロ世代11人のデザイン作  
法』(六耀社)、『仕事や人生や未来について考  
えるときにアーティストが語ること』(フィルム  
アート社)、『これからの建築士』(学芸出版  
社)ほか。

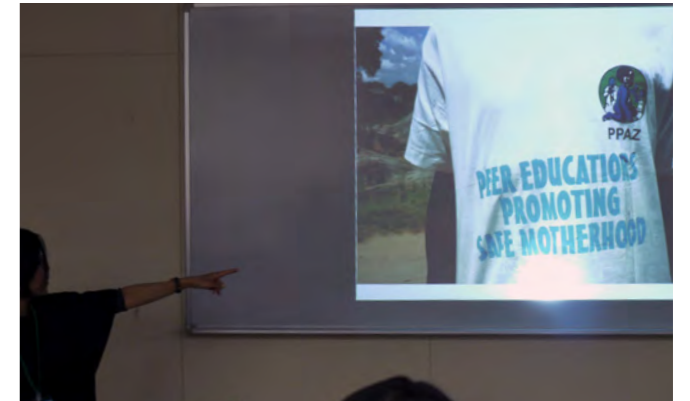
Date 10/16(Sun) Time 13:00~18:00 参加人数 20名

Theme 遠藤幹子さんと考える、人の創造力の生きる場所 Place 前橋プラザ元気21 411アトリエ

Guest 遠藤 幹子 (一般社団法人マザー・アーキテクチャ代表理事、office mikiko 一級建築士事務所代表)



オランダと日本の子育てに関する考え方や環境の違いの話は、子育て世代のみならず、若い人にとっても考えさせられる内容でした。働き方や自分の社会への姿勢を問われます。



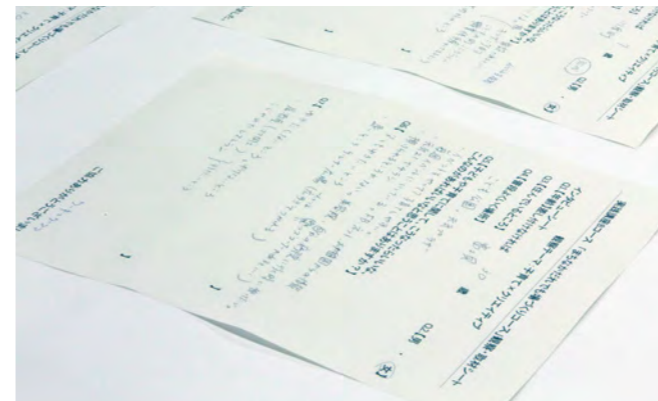
ザンビアのマタニティハウスはロコミでボランティアスタッフが集まります。みんな、薬よりもTシャツが欲しいとのこと。モチベーションアップをデザインすることも大切です。



まちなかの広場で開催している前橋スマイルキャンパス2016というイベントへ、フィールドワークに出かけました。実際にまちなかにいる人たちがどんな人? ユーザー像を探ります。



フィールドワークでは、まちなかの商店街のお店の方にも取材を実施しました。思わぬ熱いお話を聞くことができ、現状の問題点も見えてきました。参加者のアクティブな姿勢もすばらしい。



フィールドワークではたくさんの方に取材をしてきました。大人も子どもも、まちなかに少しもの足りなさを感じているようでした。どんな場所がまちなかに必要なのでしょう。



フィールドワークでの結果をもとにグループで対話しながらユーザー像を探っていきます。ゲストの方々の話も参考になって、まちなかに来てほしい人の像が見えてきました。

## 参加者のことば～振り返りシートより～

【今日ゼミに参加して、まちなかで自分がやりたいと思ったこと】

- ・自分がまちなかで何かやりたいとまでは思わなかったけど、おもちゃさんが言っていた空き店舗を引き継ぐのは面白そう! やればやってみようと思った。
- ・だいたいぶおばちゃん: 子育てに悩むママたち、病児保育で困っているママたちに「だいたいぶだよ〜」って話を聞いて子どもを預かってあげるおばちゃん。
- ・子ども向けワークショップ(美術、身体表現、学術的なことなど)をやりたい。

【講座に参加して印象的だったこと】

- ・話すのも聴くのも同じくらい必要だと実感しました。
- ・前橋ののんびり歩行者が楽しめるいいスケール感のまちだったこと。
- ・まちなかの人たちはみんなつながっていて楽しそうだった。

# 実践ゼミ3 Report

3回目は建築家の宮崎晃吉さんをゲストに迎え、前橋のまちなかの「資源」を発見しようという1日になりました。まちなかの空き店舗をどのように活用するかという問いに対して、前回まで実際に場所を見に行ったり、まちなかのイベントで市民にインタビューしたりしてきました。いろいろな議論の中で、ショッピングモールにはないものがあつたらまちなかに行きたいという意見がありました。元気21には行くけれども、商店街には来ない。そういう人に行ってみたくて思ってもらえるような場所がいいのでは？という考えもありました。

宮崎さんのレクチャーでは、まちなかにある、空き家や商店街、銭湯などを「資源」と呼んで、とことん活用しつくすという

考え方に触れました。宮崎さん曰くそれは「チャームな場所」。そんなチャームな場所が連携し合うと、まちなかになる要因が増幅されていくのではないかと思います。講座で活用を想定している「空き店舗」は谷中にあるHAGISOのようなハブ的場所になり得るのか？前橋のまちなかに必要な場所についてさらに掘り下げて考えてみたい。そんなテーマを持って、今回もグループごとにフィールドワークへ出かけて、まち探検をしました。「何年も住んでいるのに、こんな場所があつたなんて知らなかった」「楽しそうな場所、雰囲気の良い場所がたくさんあつた」「他の人に紹介してもらおうと視点が違って面白い」など、多くの発見があつたまち歩きとなりました。

## まちの資源を活かす。使い倒す。 宮崎 晃吉さん

建物の使い方=まちのつくり方。使い方を発明したり、考えたりしていかなければならないと感じていました。萩荘が取り壊されそうとき、建物に死に化粧をした「ハギエンナーレ」を開催しました。1500人が来場し、取り壊すのはもったいないと感じ、大家さんと交渉しリスクの共有をすることでGOサインができました。2013年3月に「最小文化複合施設」であるHAGISO（ハギソウ）が誕生。自営のカフェとギャラリー、スタジオ、テナントの美容室（現在は自営のショップに）。オープン初日は行列ができておりましたが、全くお客さんが来ませんでした。

それは、僕らが想定していたお客さんが違っていたからです。そこで、営業時間やメニューも夜からお昼中心にシフトして、HAGI PAPER（ハギペーパー）というメディアも開発しました。このフリーペーパーは毎月発行していて、表面にはHAGISOのコンセプトや歴史などの基本情報、展示やイベントのスケジュールやコラムが載っています。裏面はカフェのメニューになっていて、自由に持ち帰ることができます。こうしてHAGISOの情報が拡散されていって、人の流れが変わってきました。

その他イベントをたくさんやっています。そのなかの1つ、やなかこどもぶんこは、地域のお母さんたちに寄付してもらった絵本をきちんとアーカイブして、ギャラリーで展示をしていない期間に、こどもに読み聞かせをした企画です。お母さんたちがこどもたちを連れて行く文化施設はあるけれど、フォーマルな場ではできないことをやる（昼間からビールや美味しいコーヒーを飲みながら、こどもを見るなど）要望が多いです。また、居間theaterというパフォーマンス集団をかかえていて、パフォーマンスを300円で注文すると、突然始まってみんなで共有できる日もあります。ちょっと違和感のある光景が日常にあることは豊かなことだと思っています。

HAGISOも3年目になり、次のプロジェクト「hanare」を始めました。コンセプトは、まち全体をホテルにしていこう。10年間住んできて気がついたまちの良さを見えるかたちにしたいと思ったことがきっかけです。宿泊

施設がなかったの、まずは空き家をリノベーションして、宿泊棟をつくりました。HAGISOの一室をレセプションとして、そこを中心に、大浴場は銭湯、食事はまちの飲食店、お土産は商店街、文化体験はまちの稽古場など、まちをわざと一周してもらう仕組みにしました。“付加価値”ではなく“負荷価値”を。足していくことだけが価値ではなく、負荷がかかることで、逆にそこでしか味わえない体験へとつながっていきます。ただ単にいいものを外から持ってくるだけではなく、体験する人の頭の中を変える、価値観を変える、見方を変える、そうすることで同じものでも価値のあるものになっていく…そのためにデザインができることって結構あると思うんです。

分散してやるよりも一つの所でいろいろなことをやると熱量が加わっていきます。

新しいプロジェクト「Hatunean 初音庵」も準備中で、コンセプトは商店街に奥行きをつくるです。ここは完全にマスメディアに告知をしないと決めています。最後に

- ①最も価値が低いと思われるものが宝。愛でること。
- ②まずはぎゅっと凝縮させる。そののち散らす。
- ③偶然は必然（ミラクル）になる。
- ④目的はひとつ、手段は無限。



宮崎 晃吉（みやざき みつよし）さん

群馬県前橋市生まれ。建築家。東京谷中の「最小文化複合施設」HAGISO、宿泊施設hanare代表。東京藝術大学建築科非常勤講師。設計事務所HAGI STUDIOを立ち上げ建築設計や自主経営の施設を手がける。2008年東京芸術大学大学院美術研究科修士課程修了。2008年-2011年株式会社磯崎新アトリエ勤務。

Date 11/20(Sun) Time 13:00~18:00 参加人数 29名

Theme 宮崎晃吉さんと考える、つながるアクションの起こし方 Place 前橋まちなか研究室

Guest 宮崎 晃吉（建築家、HAGISO代表）



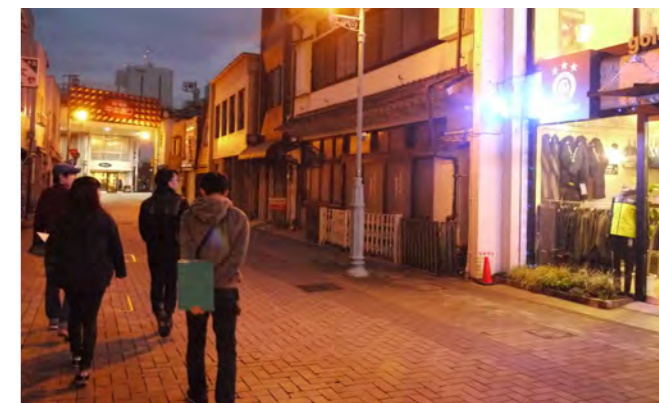
宮崎さんのお話「HAGISOの在り方」は、みんなで考えている「前橋のまちなかにつくりたい場」に照らし合わせて考えてみると、共通点が見えてきました。



4~5人のグループをつくり、まずは自己紹介から始まった対話の場も、話していくうちにだんだんと熱を帯びて深まっていきます。



グループごとに「まちなかの資源」を探して前橋のまちに飛び出しました。視点を改めてまちを見ると、いろいろと気づくことが出てきて、みんな「知らなかった〜」を連発。



建物にも注目。空き店舗を見ると、ワクワクして何かそこでできることを探し始める参加者たち。営業している店も、どんなふうでユーザーが使えるのか、楽しいポイントを探します。



フィールドワークから持ち帰ったネタをまとめていきます。あそここのところが意外だった、すてきだったなど、参加者によっても見る視点が違って面白いです。



まちなかに来てくれる人たちはどんな分野のどんな人たちのだろう。その人たちがどんな使い方をするだろう。自分たちのやりたいこと、まちの資源とユーザーのマッチング中。

## 参加者のことば～振り返りシートより～

【今日ゼミに参加して、まちなかで自分がやりたいと思ったこと】

- ・高齢者福祉と文化継承と世代間交流のコーディネート。
- ・人ともの、ものと人をつなげたい。
- ・hanareのようなまちづくり。
- ・カフェ。
- ・店舗間をつなぐ。

【講座に参加して印象的だったこと】

- ・まちに出たことによって参加者の想いや考えが共有できたのが良かった。
- ・HAGISOのエピソード。
- ・参加している人のアクティブさ。
- ・価値のないものに価値を与える考え。
- ・まち歩き。
- ・みなさんいろいろなアイデアがあり、これが実現できれば面白い。

# 実践ゼミ4 Report

Date 12/18(Sun) Time 13:00~18:00 参加人数 29名

Theme 稲庭彩和子さんと考える、人のつながるコトづくり Place 前橋プラザ元気21 506学習室

Guest 稲庭 彩和子 (東京都美術館 学芸員)

講座最終日となった実践ゼミ4回目。ゲストに東京都美術館の稲庭彩和子さんを迎えて、ソーシャルデザインプロジェクト東京芸術大学×東京都美術館「とびらプロジェクト」で活動するアート・コミュニケータ(愛称:とびら)についてお話いただきました。まちなかにつくりたい場に関わる人々が、どのようなスタンスで行動すればいいのか。どのような運営体制や考え方とアクティブな組織になるのか。ヒントがたくさん詰まったお話でした。続くワークショップでは、対話ゼミから実践ゼミまでの流れを振り返り、「前橋のまちなかにつくりたい場」のイメージを改めて共有しました。共有イメージから、ベースとなるプロジェクト案を3つに絞りこみ、グループで対話。さらに各プロジェクトそれぞれ

の構想を混ぜ合わせてより具体的なイメージを膨らませていき、最終的にはブロックを使って視覚化しました。初めて参加する方も上手に巻き込んで、いつも増して、参加者の発言がスムーズに起こっていた時間でした。毎回同じメンバーではないけれど、全9回と回を重ねてきた講座は、参加しているみなさんが自分の意見と他者の意見をうまく混ぜ合わせながら、協働してまとめ、1つのかたちにしていくことができる場へと成長しているのを感じました。「前橋のまちなかにほしい場所」、「みんなのつくりたい場所」の未来の種と、そうした場づくりのスタートに立つ気持ちを残して終了したのではないのでしょうか。

## サポーターではなく、一緒に動き、共に考えるプレイヤーを増やす。 稲庭 彩和子さん

今日は東京芸術大学と連携して行っている「とびらプロジェクト」についてお話をします。

東京都美術館は今年90周年となる日本で最初の公立美術館です。2012年のリニューアルを機に新たな事業を始めました。その1つが「とびらプロジェクト」です。この活動主体は一般から公募したアート・コミュニケータと、学芸員と大学の教員という3者で、アートを通して人々の中にコミュニケーション回路を増やし、社会に新しい価値を届けていくことを目指しています。

上野公園にはミュージアムが集まっており、芸術に関心のある人が集まりやすいという立地を活かしています。

美術館には以前から教育普及事業という枠組みがありましたが「とびらプロジェクト」のような美術館を拠点に多様な市民と共に、実現したい社会のあり方を考え活動をする、ソーシャルデザインプロジェクトの事例はまだ国内にはなく、実験的な試みでもあります。

このプロジェクトでは市民と美術館と大学の3者で取り組んでいくにあたってのさまざまな「仕組み」があり、推奨される「コミュニケーション方法」が共有されています。例えば、話し方より「聴き方」を重視し、プロジェクトに参加すると「聴く力」の講座に全員が参加します。18歳から70代までの多様な価値観の人が集まっているので「対話」を大切にしながら、とびらは主体的なプロジェクトのプレイヤーとして活動しています。例えば「とびらボ」と呼ばれる会議は「この指とまれ式&そこにいる人が全て式」と言っているのですが、ある人が発案し、賛同者が3人になったら活動を開始でき、集まった人の経験値やアイデアをクリエイティブに組み合わせることを基本としています。

また、自分たちの活動を客観的に捉えるため、必ず「リフレクション

(振り返り)」を行い、記録写真を撮り、目指した活動が終われば文章にまとめ、ウェブで公開します。個々のとびらボの活動は、その到達地点を結成時に設定し、グループの解散の時期を決めていることも特徴です。コミュニケーション方法も、単一ではなく、SNSなどのウェブと、顔を合わせたコミュニケーションが掛け合わされています。

とびらプロジェクトのエネルギーはどこから生まれるのか?それは、美術館が制約の多い場所でありながら、とびらプロジェクトというプラットフォームがあることで、多様な人々が自由度高く活動できる点にあると思います。また、美術館には普遍的な価値を持つ作品や文化財があり、それを介することでよりフラットな対話が紡がれ、新たな自分と社会とのつながりを発見できることがモチベーションにつながるのではないのでしょうか。自分から積極的な関わりをつくり、そのコミュニケーションが可視化され、関わりが実感できると、自分も結果的にケアされるような循環の構造が生まれ、そのエネルギーの循環がプロジェクトの熱量になっていっているように思います。

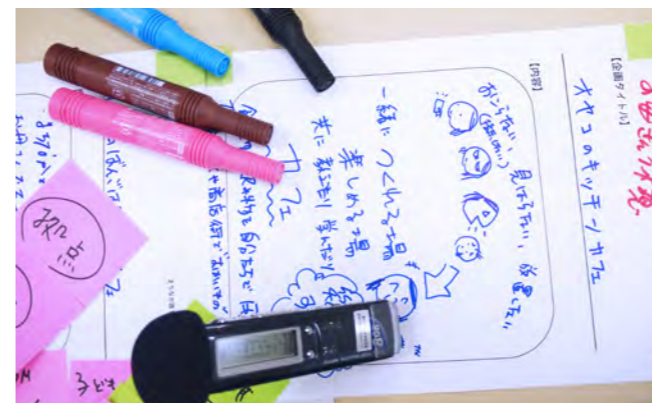
### 稲庭 彩和子 (いなにわ さわこ)さん



東京都美術館学芸員アート・コミュニケーション担当係長。ロンドン大学UCL修士修了。神奈川県立近代美術館にて地域と連携したアートプロジェクトや展覧会担当を経て、2011年より東京都美術館に勤務。作品や文化財を介したソーシャルデザインプロジェクト「とびらプロジェクト」や「Museum Start あいうえの」、また参加型展覧会「キュッパのびじゅつかん」等を企画(第5期日本展示学会賞作品賞受賞)。共著に『100人で語る美術館の未来』(慶應義塾大学出版会、2011)、『TOKYO01/4が提案する 東京文化資源区の歩き方』(勉誠出版、2016)等。



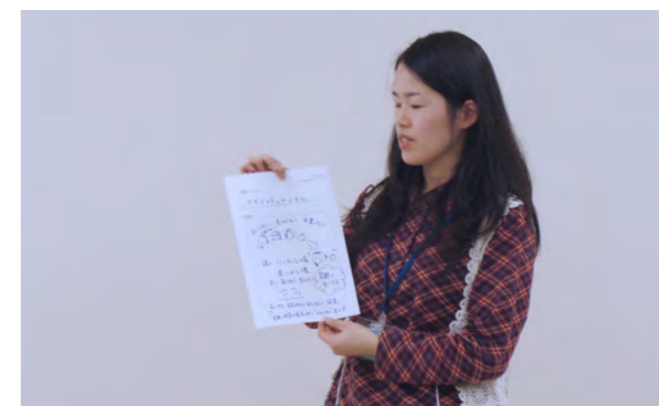
今までの講座を振り返りながら、まちなかの空き物件が、どのような場所になるのかをみんなで共有します。



まずは紙の企画書をベースに、グループメンバーでやりたいこと、やれることを出していきます。キーワードから、自分のバックグラウンドを持った深い話へと対話は進みます。



ブロック作品は、グループごとにメンバーの特色が出ているアウトプットになっています。細かい部分をつくりこんで詳しく説明してくれるメンバーが楽しそうです。



参加者からベースとして考えているプロジェクトを発表してもらい、「この指とまれ」方式でグループを決め、プロジェクトをさらに進化させていきます。



ブロックで自分たちのつくりたい場をつくっていきます。手を動かしながら話すと、対話も進み、新しい意見もブロックでどんどん付け足していきます。



グループの企画案を全体に説明しながら、共有していきます。最初の案にメンバーのやりたいことをうまく織り交ぜて、プロジェクトとして立ち上がりそうな企画もありました。

### 参加者のことば～振り返りシートより～

・誰もがフラットにつながり合える場所をつくるということだが、場所ではなく、人が重要だということに気がついた。  
・誰でも巻き込むのは難しい。みんな生活するので手いっぱいなのである。そういう現実が壁になっている。  
・まちなかのことをこれだけ考えている人がいることを知り、より良いまちづくりができるかなと思いました。

・たくさんの人とはどのような人なんだろう?  
・みんなが声を出し合っていると、まちなかも変わっていき、人も元気になっていけると思います。  
・とびらのこと、サポーターではないアートコミュニケータのあり方、「リフレクション」の活用、プログラムの最後をデザインしてしまうなど印象的な話ばかりでした。



まちなかの空き物件を実際にリサーチ。隣にある空き地の活用や、裏口から屋上へと通じる階段の存在など、その場へ行ってみてわかること、想像が膨らむことがたくさんありました。



子育て中のお母さんには子どもスペースも用意して、参加しやすいような仕組みもつくりました。子どもたちは、楽しそうに遊びながらたまに対話に参加していました。



フィールドワークでは、まちなかにいる人々にどんどん話を聞きました。講座参加者の方も最初は緊張していましたが、すぐに話が弾むように。聞きだし上手でした。



ワークショップではさまざまなツールもワークの助けになります。視覚化することで参加者みんなの共通の認識が得やすくなります。ビジネス折り紙も大活躍でした。



「いつも自分がいるフィールドではない場所に敢えて参加することで得られる発見がある」と講座を楽しんでくれる参加者も。多様な参加者からいいアイデアが生まれます。



講座も回を重ねると、話し合いがスムーズになってきます。自然と役割分担ができ、その役割を回すことができている。まちなかにも自分の役割を見つける途中です。

## 集中講座

2日連続で行われた集中講座。  
2人のゲストによるレクチャーとワークショップ、  
多彩なゲストを迎えて実施する  
オープントークイベントを通し、  
そもそも「今のまちなか、そして社会には  
何が必要とされている？」という本質的な問いについて、  
一緒に考えていきました。

# 集中講座 Report トーク&ディスカッション

Date 12/9(Fri) Time 14:00~18:00 参加人数 27名

Place 前橋プラザ元気21 506学習室

Guest 熊倉 敬聡 (芸術学、元京都造形芸術大学教授)

**1日目** 2日連続の合宿形式で行われた集中講座。これまでBコースでは、「まちなかでの場づくり」について、そして「まちなかの場には、どんな人が来るといいか」、「どんなことができるといいか」ということについて、対話ゼミと実践ゼミを通して具体的に考えてきました。集中講座では、そうした具体的なアプローチから1度離れて、本質的なこと、これからの世界や地域、社会に本当に必要なものやことってなんだろう？今大事にしなきゃいけないことってなんだろう？ということ話を話していきま

1日目は元京都造形芸術大学教授であり、芸術学が専門の熊倉敬聡さんをゲストに迎えました。レクチャーでは、これまで関わってこられた事例の紹介を交えながら、人が集い、何かが生まれていく場、コミュニティにおいて大事なことについてお話いただきました。また、ギフトエコノミー・ワークショップでは、参加者それぞれの、GIFTS=提供できることと、NEEDS=必要なことについて話し、それらをマッチングすることを介し、ギフトエコノミーという、お金を介さない「贈与経済」の1つのありようを体験しました。

## “これからのもう1つの経済”のあり方として 「ギフトエコノミー=贈与経済」

熊倉 敬聡さん

ヨーロッパではカフェはただお茶を飲むところではなくて、コミュニティをつくる重要な場所です。日本では、そうしたコミュニティ・カフェとして、1993~95年にWeekend Cafeというところがありました。京都大学の学生寮の一角に暖炉がある、雰囲気も趣もある空間で、2週間に1回、土曜の夕方から日曜の朝方までやってたんですね。当時のアート界の人にはすごく影響力がある重要な場所でした。飲みものは目の前の酒屋さんで買って来て、食べものはスナック程度。お店と考えればこれ以上手抜きな空間はないけれど、社会的な肩書きを気にせず話せる空間でした。いろいろな人が交わり、自然に面白い企画が発生していきました。当時の東京にはないものがあり、惹かれました。単にきれいな空間があってもだめで、そこにどれだけ魅力的な人がいるかが重要です。人は空間に惹きつけられて集まるのではなく、人に惹きつけられてくるのだと思います。

### ■大学をなんとかしたい。

仕事としては、大学で教えていましたが、大学の授業は先生が半年~1年のプログラムをつかって指導するというシステムなんです。でも、1年後に何が起るか分からないのに、1年後の授業をつくるのはナンセンスだと感じていました。例えば東日本大震災が起きる前は1年後も同じ日本だと思っていたけど、起きてみるとまったく違う日本になっている。シラバスのない授業では、僕ではなく学生たちが、教室の使い方から成績評価まで考え、僕はサポーターに徹していました。でも、教室でできることには限界があります。そこで、最終的にキャンパスの外に好き放題できる場所をつくっちゃえ! ということで、有志の先生たちと一緒に三田に一軒家を借りて、オルタナティブな学びの場=三田の家をつくりました。そこを商店街の方々とも連携しながら、7年間運営しました。

### ■新しい経済、文明の在り方をつくる

京都に移住してから、社会的起業家が集い、互いに高め合う場、

「変革の道場」としてImpact Hub Kyotoという場を有志で立ち上げました。

ギフトエコノミー、贈与経済が何かという話をしていると長くなってしまうので、まずは「ギフトサークル」という簡単なワークショップを体験してもらいたと思います。経済というと普通、お金を介して売り買いをする仕組みですが、このワークでは、お金を介さずにもやサービスをやります。つまり、ワークショップではサービスの移動が起きて、お金を介さない、というものです。

手順としては、1巡目は、NEEDS=今自分が必要としているもの、こと、サービスを言ってもらいます。例えば『お米がほしい』とか、『疲れてるから誰かにマッサージしてほしい』など。2巡目は、GIFTS=自分が人に贈ることができるもの、こと、サービス。『リンゴが余っているのであげます』とか『ベビーシッターをします』とか。2巡したら、マッチング・タイム。自分のほしいものを提供してくれる人がいたら、実際にその人と話し交渉する時間です。ギブアンドテイクではなく、一方通行でもいい。こんなワークショップです。



熊倉 敬聡(くまくら たかあき)さん

元慶應義塾大学・京都造形芸術大学教授。2000年代は、教育現場の変革の作業を展開し、大学を地域・社会へと開く新しい学び場「三田の家」の立ち上げ・運営に関わる。2013年以降は京都に拠点を移し、21世紀的精神性の研究・実践に従事するとともに、変革の「道場」Impact Hub Kyotoの立ち上げ・運営に携わる。最近では、比叡山の麓に引っ越し、「くらしごと」の仲間とともに新しい生活の形を模索中。



熊倉さん曰く「日々の生活をいかに豊かにしていくかがアート。Art of Living: 生活自体をつくっていく、クリエイティブしていくことが大切だと思います。」



ギフトサークル・ワークショップでは、NEEDS GIFTS がぴったりとマッチして、すぐに贈与が成立することもありました。



その場に参加する人たちはまずは自己紹介。ゆったりとした時間が流れ、互いの話をじっくり聞きあう空間が生まれていました。



子ども連れの参加ができるのはBコースの特徴。多様な参加者がしっかりと意見を言えることがとても大切です。子どもが遊ぶスペースも確保してあります。



ギフトサークル・ワークショップでは人に何かをしてあげられることや、それで人が喜ぶことが、自分の喜びや幸せになるということに気づいたという感想が多数出ました。



ギフトサークル・ワークショップでは、その場に出した自分のほしいもの、与えられるものからどんどん話が発展していきました。経済の根本はこういうことなのかなと体感しました。

## 参加者のことば～集中講座を終えて～

・マイノリティの中にもマイノリティが生まれるという言葉が印象に残りました。  
・一番印象に残っているのは、LGBTの人たちとワイワイするだけじゃダメということが、ぐさってきた。最近障害を持っていることもたちとワイワイ楽しくやって、満足していた自分がある。まずは、関わるのが大切と思った。  
・豊かさってなんだろうな?と考えた。自分の中では漠然と、ものが充足することが、豊かさかなと思っていた。難しいと思った。

・前橋から出たことがない人は、1回外に出てほしいなと思う。外に出て自分の可能性を広げてみてください。  
・一番印象的なのは「必要以上に成長する必要はないのではないか」という言葉。



# 集中講座 Report トーク&ディスカッション

2日目

集中講座、2日目は九州大学大学院芸術工学研究院助教の長津結一郎さんをゲストに迎えました。「アートとはなにか」という本質的な問いを掘り下げていく時間となりました。障害のある人の表現活動に関する研究をしている際に出会った、アール・ブリュットという概念。その概念が、時には都合のいい扱われ方をしているということ、それは昨今のLGBTの扱いにも似ている部分があるとのことでした。そもそも障害者と健常者のボーダーラインはどこにあるのかという問いも出されました。九州大学で行なっている中山間地域でのアートプロジェクトのお話では、地元の人たちに「参加してもら

う」ことをどのように考えたらいのか、という問題提起がありました。長津さん曰く、この線引きは障害者と健常者のボーダーラインと似ている部分があるとのことでした。また、この日の午後は、坂倉さん、茂木さん、熊倉さん、長津さん、住友さんと参加者のみなさんを交えたオープントークが行われました。そこでは「豊かな暮らしとはなにか」という問いのもと、日本の歴史を踏まえた物質的な豊かさについての話からスタート。ものを生み出す生産者のこと、土地の気質、そして徐々に話題は、精神的な側面や、そこに影響を与えるアートに移行していきました。

## アートと多様性をめぐって 地方都市でのアートプロジェクトなどを事例に。

長津 結一郎さん

アール・ブリュットが新聞で取り上げられることがとても増えてきました。アール・ブリュットとはフランス語で「生(き)の芸術」という意味で、専門的な美術教育を受けていない人の表現活動を指しています。新聞などでは「自由な芸術」「魂の表現」などという言葉とともに扱われていますが、そのような扱い方には疑問を持っています。障害がある人が描いている絵がすごい、という目線は消費的であるようにも感じます。「健常者」の社会とはまったく異なる価値観を示しており、それを丁寧に上げていくことで、これまでのアートのあり方を批判したり、疑問を呈することにつながると考えています。しかし実際には、どこか都合のいい扱われ方をされている気もします。ゲイのアクティビストの方と話をした際に、「LGBT」という用語が消費的に使われていると聞き、アール・ブリュットの使われ方も似ていると感じました。つまり、「健常者」にとって都合のいい「障害者」の在り方になっているのではないかと感じています。

### ■ 障害のある人とはいったい誰か

そもそも、社会に対して「障害」を感じている人ってどんな人でしょうか。脳性まひの人はどうでしょうか。セクシュアル・マイノリティの人はどうでしょうか。介護士は？ 私自身は、マイノリティとマジョリティを隔てる「線引き」にとっても関心があります。その線引きは固定されたものではありません。揺れ動いたり、つなぎ変わったりするもので、つねに流動的なものであるはず。そのことは、このコースの名前にも同様に考えられることでしょうか。「まちなかだれでも場づくりコース」の「だれでも」の部分。はたして私たちが「誰でも」というときに、どのような人を包摂しているのでしょうか。

### ■ 地域の課題解決のためにアートがあるのか？

今年赴任した九州大学では、ソーシャルアトラボという教育研究組織の一員として、福岡県八女市黒木町笠原地区で「里山を編む〜天神・奥八女バスの旅〜」というアートイベントに関わりました。ここは八女茶

発祥の地で、4年前に大きな水害で被害を受けた場所です。きのこ村というキャンプ場だったところは、いくつかのバンガローを残し、大半が流出しました。ここでアーティストが関わったインスタレーションものを置きました。また、廃校になった小学校では、まちの人々から集めた作品をもとにして大規模なインスタレーション作品を制作しました。その中で感じたのは、地元の人たちからさまざまなものをお借りし、集めるときは苦労です。さまざまなところをお願いにありがた、回覧板も回したのに、手を挙げてくれた方は2人だけでした。このときに、作品の完成を目指し重視してしまうと、ともすればたった数人の力しか借りていないのに「いろんな人たちの力で作った作品です」と言い切ってしまうこともできます。今回は幸い、手を挙げてくれた方から芋づる式に次々と紹介いただき、地域に眠っていたさまざまな資源を活用することになりました。難を逃れた思いでしたが、作品をつくる側が地域をダシに取ることで表裏一体であることを肝に銘じなければと感じました。この話は、ここまでしてきた「境界線」の話とも近いと思います。消費されている状態のままでは、地域はいつまでたっても搾取される側に回ってしまう。アートを通じて複数の地域のできごとや物語がクロスフェードするような瞬間を目指していきたいと考えています。



長津 結一郎(ながつ ゆういちろう)さん

九州大学大学院芸術工学研究院コミュニケーションデザイン科学部門助教。博士(学術、東京藝術大学)。NPO法人多様性と境界に関する対話と表現の研究所代表理事。専門はアートマネジメント、社会包摂。アートと社会に関する理論と実践の往還を通じた研究を行う。共著に『アートプロジェクト:芸術と共創する社会』(水曜社、2014年)、『障がいのある人の創作活動:実践の現場から』(あいり出版、2016年)、『文化経済学:軌跡と展望』(ミネルヴァ書房、2016年)など。

Date 12/10(Sat) Time 10:00~17:00 参加人数 25名

Place 前橋プラザ元気21 506学習室

Guest 長津 結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院 コミュニケーションデザイン科学部門 助教)

### Q.豊かな暮らしとは？

集中講座2日目の午後は<番外編>オープントークイベント@前橋。

多様な場づくりに関わるゲスト5名(坂倉杏介さん、茂木一司さん、熊倉敬聡さん、長津結一郎さん、住友文彦さん)を迎え、「豊かさってなんだろう?」というテーマでいろいろな豊かさについて、時には参加者も交えて、話し合いました。

**茂木**昔と比べれば、確実に豊かになっているけれど、その豊かさに気づけていないのが問題。豊かになると食べ過ぎも含めて、何でも過剰になってしまう。

**熊倉**50年で急激に変わりすぎている。人が追いついていない。

**坂倉**日本は何もなかった時代、必要なものすらなかった時代から豊かになったけれど、世界も同じなのか？

**熊倉**日本は急速に豊かになった。ところが京都は経済的成長ばかりを追っていない。ものづくりのこだわりが強く、世界でもトップレベル。人類の創造性を牽引する可能性がある。ものづくりと生活が分離していないのか…。

**坂倉**ほっといたらなくなってしまふ、農家の人たちの生活文化？

**住友**専門家ではないのでよく分からないけど、アーツ前橋の開館前から地域に関わっているうちに、いくつか課題が見えてきた。農業後継者がいないとか、作物を工業製品のようにどんどんつくっていくことでは、プライドが持てない。

**坂倉**急に量の豊かさに価値が見出され、大量生産をせざるを得ない生活になった。農家の人たちもあるときから、プライドを持ってなくなってしまった。日本は資源が少ないと言われるけど、そんなに狭くないし、生産量も少なくないはず。土地の利用に問題があるのでは。外から入れて売らないといけないのは富国強兵の頃の話。観光資源・農業資源など、日本は足りていないわけではない。

**住友**外の人から見ると、あれ？おかしくない？と感じるようだ。栄養価もそんなに高くない、生産性もそんなに高くないのに、なんでこんなにお米をつくっているの？農家はそんな合理的な理由でやっているわけではなくて、先祖の土地をどう利用するか。つまり精神的な土地とのつながりの問題。食料をめぐる問題は合理性ではなく、倫理？生産者だけに押しつけているからそんなことになってしまう。

**茂木**そういうことを意識できないようなシステムになってし

まっている。とても安い食べものに対して、これは危険であるという認識ができない。

**熊倉**生きることのマインドセットを変えないと基本的にダメ。アートの役割は人々に気づきを与えること。そういう意味で今自分は瞑想について考えたり、実践したりしている。

**会場参加者**瞑想というのは、自分のぼんやりしている状況にも近いように思う。

**熊倉**本では瞑想というと、座禅を連想する人が多いけど、瞑想は今ここに生きていることに気づき続けるということ。それに気づくだけで、かなりクリエイティビティが上がる。

**茂木**そういうことができる人はある程度時間もお金も余裕のある人だけかも。今さまざまな場で、マインドフルネスが有効であることも周知ですけど。

**会場参加者**障害者の人たちが、何時間でも制作してられるのも瞑想？

**茂木**それは違う。(自閉的傾向の)彼らが生みだす表現は生きるためのギリギリのもの。極度の緊張状態から生みだされたもの。

**住友**今、コンパクトシティって考え方があるけど、何となく世の中全体が均質化され似てきてしまう。もっと異種混交的な要素がほしい。今、何が足りないのか、音楽とかダンスとか食べものとか、もっと欲望に近いものがまちと結びつけばいい。Weekend Cafeみたいな。

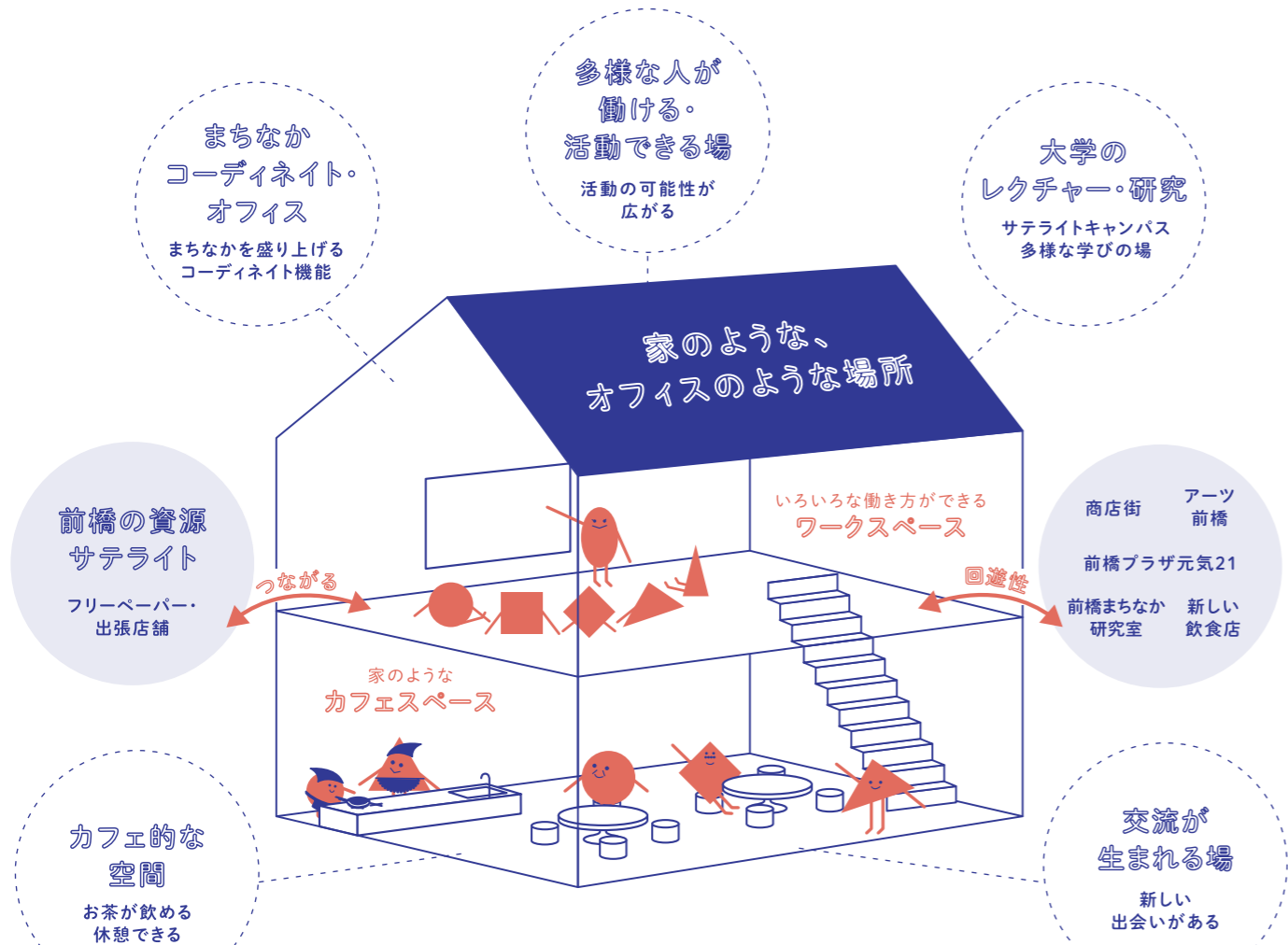
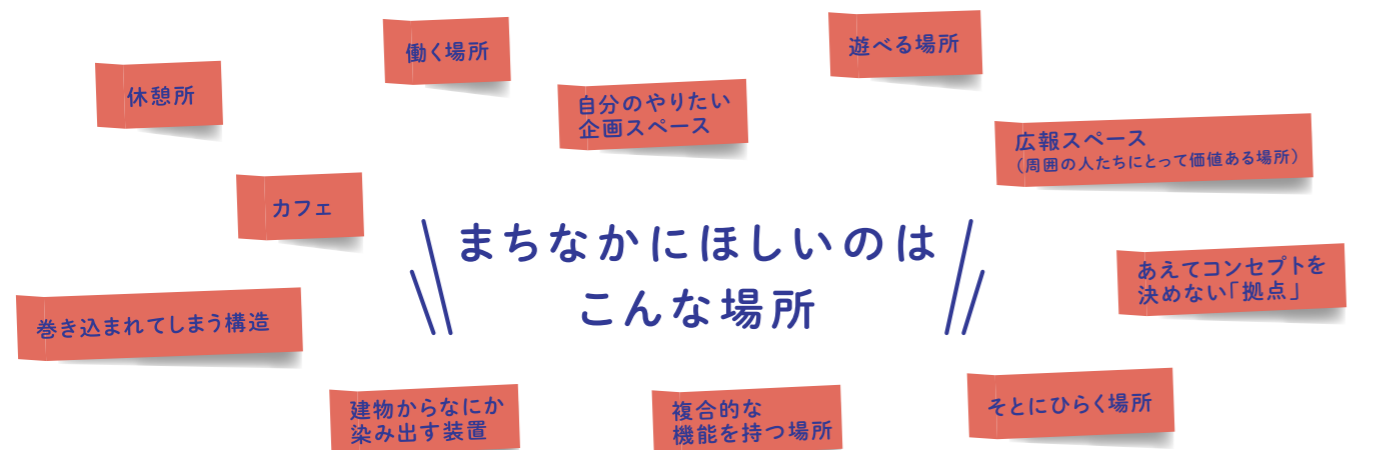
**茂木**みんながそれぞれの考えていることを言い合う、対話的な関係性が生まれるコミュニティや場が増えるといい。人材育成とはされるものではなく、生まれていくもの、生みだされていくもの。

**坂倉**集まっている人たちがこうしたんだというのを伝えていかないとけない。私たち、こう暮らしたいとか生きたいとかいうのをもっと伝え合っていくとけない。

**長津**今日をきっかけに豊かさは？を自分でも問い続けていきたい。



# Bコースで見えてきたこと



人のニーズを結びつけて  
NEEDS — 家 — WANTS  
新しいプロジェクトを生み出していく場。

前橋のまちなかにどのような場があるといいか?をテーマに考えた全9日間の講座。多様な分野で活躍するゲストの話を聞き、そこからコミュニティをつくる、場をつくるヒントを学びました。実際にまちなかの空き物件を使用すると仮定して、フィールドワークにも出かけ、まちの雰囲気を感じながら、自分たちにできることを探っていました。

## 1. キッチンカフェ

親子でご飯をつくって食べられる、持って帰れる



## 場所ができたなら すぐにやりたいプロジェクト



2. スタジオルーム  
なんでもできる、誰でもクリエイティブになれる



3. Weekend Cafe  
月に一回、世界中からおもしろい人が集まる

まちなか拠点のコンセプト  
”エンゲージメント・プレイス”  
何かの関わりを得られるような場所って、すごく大事なのではないか。人と人、人とまちの関わりをなかに、自分が本当にやりたいことと、接続していくようなエンゲージメントがある場所をつくりたい。

## 「場」のキーワード

- つながりが生まれる場
- 複合的な機能を持つ場
- 全体性を大事にする場
- トランジションを過ごす場
- ロールモデルに出会う場
- 創造性が刺激される場
- 人が自発的に活動する場

詳細は、P39の対談をご覧ください。

# 対話と実践を段階的に体験。場づくりのヒント・・・『いつでも開けておくこと・・・』

## ■対話と実践を段階的に

**茂木** Bコースはゲストがたくさん来たのが特徴でした。どんなふうを考えて、人選しましたか？

**坂倉** アートだけに関心のある人たちだけではなく、いつもまちなかで活動している人たちだけでなく、もう少し広いところから客観的な視点を持っている人に来てほしいなあって、声をかけました。

こういう場合、男性ばかりになる現状もあるので、半分ぐらいは女性のゲストの話を知りたいと思って選びました。また、場づくりとか、まちなかかいうと、建築系の方が増えることが多いのではないかと思います。ハードな分野から来ていただくというよりも、もう少し生活の実感レベルのところから場をつくらしたりとか、いろいろな活動をされている方をお呼びしたかった。ソフトなアプローチであり、ポトムアップ型でやっている人の方が、今回の講座には合うかなあと思いました。そういう意図でさまざまな分野から多様なかたちの活動をされている人にお声がけさせていただきました。

**茂木** 対話と実践という構成は、もともと分けて考えていたのですか？

**坂倉** いきなりつくり始めるというのはなか

なか難しいので、少し広い話とか、遠くの話とか、一見関係なさそうな萌芽的な話や事例も含めて聞いて、そこからまずは本質的な議論をしてきたかった。目先の金が儲かる、儲からないとか、人が来る、来ないとか、そういうことじゃない本質的なことを共有したメンバーで、じゃあ実際デザインプロセスをどうやっていこうか？というふうに段階を追って進んでいくのがいいのではないかと思いました。

最初の対話ゼミは『掘り下げて広く考える』、実践ゼミは『それをみんなでかたちにしていこう』という構成にしてみました。うまくいったかな？

**茂木** 良かったですよ(笑)。私が当初、アーツ前橋の住友さんと話して考えたのは、ある程度考え方を共有できる方々に場づくりとかたのプログラムをつくらせていただくということでした。

坂倉さんたちは、前橋をリサーチした結果も踏まえておられるということだったのでびっくりかなあと思いました。あと、講座の参加者ですが、前橋にはすでにまちなかでいろいろな活動をしている方がいるので、その方たちに参加してもらったら、ある程度成り立つかなあという予想をたてて始めました。でも、なかなかすんなりとはいかなかったですね。彼らには彼らの仕事があるので、すでにいろいろなことが起きてしまっている段階で、こちらに合わせて学習してくれというのも、少しおこがましかったかもしれない。でも、まだ活動には至っていない若者たちがもう少しいたような気がしていて、そういう若者たちが全然来なかったの、そこはちょっと残念でした。

## ■人材を掘り起こす難しさ

**坂倉** 茂木先生から見ると、参加者のグループのバランスがもうちょっと多様だとさらに良かったという印象ですか？

**茂木** 若い人たちがもう少し来るかなと予想していました。いわゆるアート活動だったら、うちの学生(群馬大学教育学部)も入りやすかったのですが、『まちなかの場づくり』と

いうテーマは少し難しかったようです。教育学部の学生は、自分たちが何をしたいか全然分かっていなかったようです。こどもの教育の話題だとすーっと入っていったと思いますが、まちづくり/場づくりには急に意識が対応できなかったのかもしれない。部分的には関心が向いても、全体が把握できていないので、自分の学びにしにくかったのでしょう。そういう意味では、対話ゼミと実践ゼミという構成はやはり良かったのだと思います。

**坂倉** 学部生さんで定着された方は残念ながらいらっしやらなかったのですが、全体的に最後まで通して参加してなくても、連続講座の中で徐々に醸成していく、方向性というか価値観というか、そういうものにはすごく大きな影響を与えてくれた気がしました。

**茂木** 講座の最終回になってやっとなんかこう、本当に来たい人たちが来たなという印象で終わったので、それは良かったです。まだ続けなくちゃいけないかな(笑)。

**坂倉** そうですね。最後の最後で何か可能性が見えてきました。

**茂木** そうそう。『少し見えた』みたいな、『お、いるんだ』みたいな人たちが増えてきましたね。掘り起こすのって難しいですね。

**坂倉** 難しいですね。本当に思った以上にそう感じました。

**茂木** 3年くらいはかかるのかもしれないですね。

**坂倉** ちゃんと“焚き火”をやって、「あ、来てもいいのかな？」って思うドアをずっと開き続けていかなくてはというのはあると思います。参加者がいつ「あ！これ俺のプロジェクトだ」とか「あ、俺まちなかでなんかできるかも」と思うかは誰にもわかりません。その人がそう思うタイミングって、その人のタイミングでしか来ないと思うのですよね。この講座のタイミングでは「いや、私じゃないかも」って思っているかもしれないけれど、半年後に「やっぱり私だったかも」って思うかもしれない。そういう意味でいうと、群馬大学のこういう講座っていうのは、本当は毎年やってないだめだと思のです。毎年毎年、

まちなかでちゃんとそういう機会があるということが大切なのではないでしょうか。社会教育という意味でも、やはりその人の必要なタイミングでちゃんとドアが開いているってすごく大事だと思います。企業のタイミングだったら、今年、今日やれば一番儲かる、というところで開催されるかもしれないけれども、そうじゃなく、人生の次のステージに行こうと思ったときに、「あ、あそこに行けばなにかあるかも」って思ってもらえる場所があることが大事だなと思います。

**茂木** そういう意味ではCコースでやっていた広瀬川美術館のカフェは、基本的には金曜日・日曜日でオープンしています。あんまり人は来ないのだけど、継続していけば何か可能性は出てくるかなとちょっと思い始めています。

**坂倉** 素晴らしいですね。

## ■日常になるということ

**茂木** 巻頭の挨拶文でも書いたけど、私自身が前橋中心商店街で2007年にコミュニティカフェをやったときに、あまりうまくいかなかったのです。結局、前橋に住んでいる人たちはそんなに変わらないのですよね。だから外から来る人たちが、学びの場をつくって、まちなかの人たちと協働しながらできごとにしていくことは、本当に難しいです。当時、まちの中の人たちをコミュニティカフェに呼び込むのは、ほとんど無理だったですね。誰も動かなかったです。

**坂倉** ある程度の年齢の方々は大抵生活のリズムもサイクルも固定されているでしょうし、新しいものを受け入れるのはハードルが高いかもしれませんね。

**茂木** 例えば、まちなかで何かやっているときに「何やってるの〜？」って近所の人たちが寄ってきてくれるみたいな感じだったらまだいいのですが、今の前橋にも、その感じは全くないですね。結構厳しいなと思います。ご近所づきあいの仕組みがあった時代にはあったことなのでしょうが、今は難しいのかな。

**坂倉** 東京の『芝の家』では、何もやってないのに、毎日40人近くの人があるんですが、これ

は集客という常識からするとありえないことなんです。つまりイベントをやったりとか、何か来る目的をつくらないと人は来ないという常識からすると、毎日毎日40人呼ぶって本当に大変過ぎです。そのためだけに呼ぼうと思っただけで、すぐ倒れる。『芝の家』があまり人を呼ぶ努力をしなくても、毎日多くの人で賑わっているというのは、場所が魅力的だとかそういうこと以前に、そこに来ている多くの人の生活習慣になっているという点が大変。各個人の生活の中で必ず寄るところになっているので、その人にとっては当たり前、何かあってもなくても、まあ、寄るみたいな。**茂木** そのためには開いてなきゃダメですね。**坂倉** そうですね。その人の人生の一部、生活の一部になっていくと定期的に人が集まる、その中に、初めての人がある程度いるという状態になっているのがすごくいいですね。そうじゃない限り、まちなかもそうですが、イベントごとに呼ぼうと思ったら、すごく大変です。まちなかに何か用がある人、月に1回とか週に1回でも、まちなかに用があるという人の数が徐々に徐々に増えていくと、呼ばなくてもその場を行き交う人が増えると思います。

**茂木** 現状、用はないんだよね。

**坂倉** そうなのです。

**茂木** 私も、アーツ前橋があって、そこに仕事があるから行くけれど、そうでないとなかなかまちなかには行かないです。

**坂倉** 茂木先生にとってはアーツ前橋が用事なんですよ(笑)。

**茂木** 用事(仕事)と遊びのどっちでもある場所がもっとできるといいな〜(笑)。

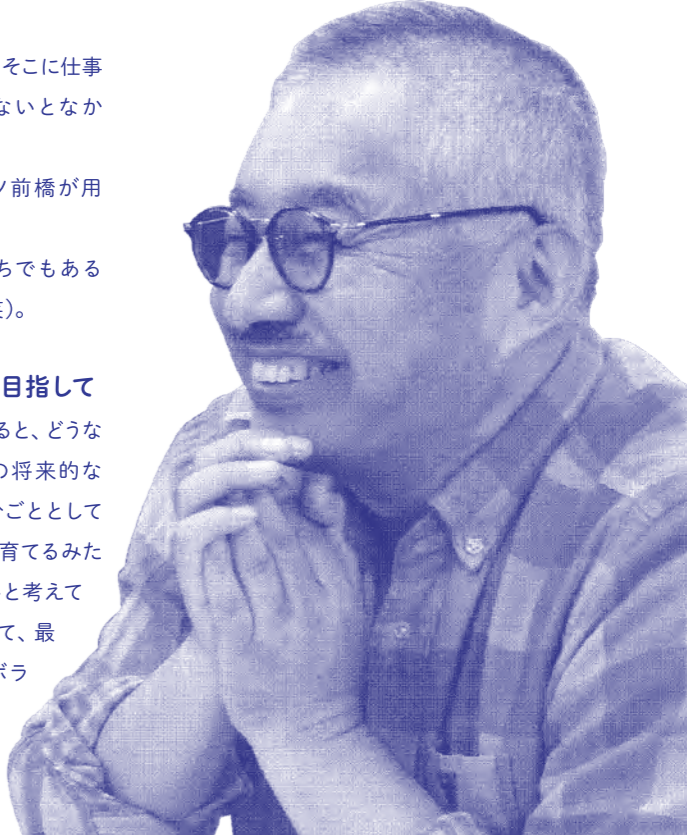
## ■参加者主体の学びの場を目指して

**茂木** 人材育成という観点で考えると、どうなのだろうか。特定の目的のための将来的な準備=人材育成ではなくて、自分ごととして何かをやってくれる地域の人材を育てるみたいなことを最終的にできるといいと考えています。なので、この講座を通じて、最初はサポーター(アーツ前橋のボランティア)がもっと増えればいい

なと思っていました。結局その人たちが増えることによって、アートがまちなかに広がっていくかなと考えていましたが、十分ではなかったようです。ボランティアは、クリエイティブな仕事をした人ばかりではないのですよね。そこはミスリーディングだったかな。自分が変わるって一筋縄ではいかないし、なかなか難しいのだと思います。東京都美術館の『とびらプロジェクト』みたいな理念、アートを通して何かをつなぐ人ができればいいなと思います。単に美術館のボランティアではなくて、そこでの学習が自分のやりたいことのきっかけになってくれればいいなと思っていましたが、こちら側がちょっと頭でっかちだったのかもしれないです。自分の気持ちとしては、講座自体が大きなワークショップみたいになって、どんな方法でも、自分なりのスタンスで参加してくれればいいし、そこで何か学びがあればいいとも思っていました。主催者、参加者という分離した関係になっていて、フラットにはいかなかった。上手に自分の中に文化庁講座の仕組みを使って学ぶことへの意識づけをしたかった。講座のはじめやまとめの時間などにそういう話もしましたが、参加者のみなさんの実際の行動として現れ



坂倉 杏介



茂木 一司

# 対談1：坂倉杏介×茂木一司

るところまではいきにくかったですね。そこが1番難しかった。Bコースだけではなく、これは事業全体としても当てはまることです。

Bコースは全体の中では、他コースのようなアートプロジェクトではなくて、デザインプロジェクトのような変わったコースだったので、参加の仕方という点では、ゲストによって参加者の層が全然違って、まさに自分の興味のあることをまずは参加のきっかけにしていたのが特徴的でした。実践ゼミ3回目にHAGISOの宮崎晃吉さんをお呼びした時点で参加者の雰囲気がガラッと変わった。

**坂倉** そうですね。そういう意図で設計したわけではなかったですが、偶然そうになりました。講座の前にあった「ここにあるタカラもの・空き家空き地コンペ」（2016年、宮崎さんが審査員として参加）のこともあって、興味のある方たちが集まっているタイミングにぴったり合ったようなのですけれども。

**茂木** 宮崎さんが群馬で何かを始めるというタイミングとも合致していたのかもしれないです。ちょっと流れが変わりましたね。プログラム云々ということではなくて、人=宮崎さんがいるから来るということであったので、学びの動機付けにはなったかな。普段から、他者理解の重要さを言っていますが、結構ハードルが高いですね。他者へのイメージネーションを持つことはやさしい社会をつくるキーワードになっているので、そこをどうにかして変えていかないといけないですね。

## ■Bコースへの期待

**茂木** Bコースへの期待としては、そこにいる人たちが変わるチャンスになればいいなとは思いました。坂倉さんたちの前橋のリサーチがどんな風に活かされるのかなという期待もありました。場づくりというものを僕があまり分かってないということもあるかもしれませんが、具体的にアクションを起こす段階まではいかなかったけど、ようやく種を蒔こうかなというところで終わった感じですね。でも今回多種多様なゲストの先進的な事例のお話は参加者ばかりでなく、前橋全体への大きな刺激になったはずですよ。

自分にとって見えてきた社会問題はいっぱいあります。ゲストの話聞けば、世の中の動きが理解できました。やはり女性の働き方という問題は、僕にとってはインパクトのあることでした。

たまたま、こども連れの受講生が参加したっていうのもあるけれども、こどもが来て参加するっていうのは全コースの中でも特徴的で、他にはなかったです。意味生成という意味では、僕らがワークショップデザインをやって協働の学びも起こる場となっていました。学習というのは基本的には自己学習なので、そういうことをもっと伝えたいかった。

最初のアウトプットのブロック作品と、最後の回のアウトプットのブロック作品では、思考や深さが違ってましたね。回を重ねて、人と話す、場で何かをつくることを面白がって最後に協働でつくったものはプロジェクトとして立ち上がりそうな可能性も秘めていました。

単純に話すということをもっとやった方がいいのかもしれない。

世の中の的には幼稚園の問題があったりするし、電車の中で泣くこどもやベビーカーが白い目で見られるという問題とか騒がれています。僕は子育てが終わった世代ということで、あまりリアリティがなかったけれども、とうの昔に女性が家にいる時代ではないですよ。それをフォローできていない社会、男性社会が崩れない社会である限り、女性は働けないじゃないですか。まあ、これはアートやデザインだけの問題でもないかもしれないのだけど、どっからどう崩していいのかわからない、そういうきっかけに、この場づくりがなっていけばいいのかもしれないです。

**坂倉** まだ男性がフルタイムで残業しながら働くというのがスタンダードで、その働き方ができない人の実情や気持ちに社会の想像力は十分に向いていませんからね。

**茂木** その辺、遠藤さんの仕事ぶりなんかはさすがですよ。やるな〜という感じですよ。コミュニケーション能力の高さと言ったらものすごいですね。

## ■まちなかにポンと置いていく講座

**茂木** 最初は名前が決まらずで、名前が決まったときに「まちなかだれでも場づくりコース」ってとてもいいなと思いました。チラシも素敵で雰囲気が良く出てました。

オープンにしたことで、女性が参加しやすくなってすごくよかった。他のコースがアート寄りに対してこのコースはデザイン寄り。アートでカバーできないところをデザインでカバーしてくれた感じがしました。武山さんのサービスデザインという言葉も新鮮でしたし、遠藤さん、宮崎さんの活動も目的を持ってやる、デザインの活動の特色を参加者のみなさんにうまく見せていました。アートよりも分かりやすいデザインに興味を持った人たちがたくさん来たのではと思います。

今回のBコースのゲスト陣から世の中いろいろな人がいて、いろいろなことをやってるなと感じました。そういうふうになっちゃっている現実を、前橋にいる私たちは学ぶ必要があります。事例はゲストの方々が接したリアルな問いに対する問題解決であったので、高いスキルとマインドに刺激されました。グローバル化ということも、考えさせられました。「アフリカが日本に関係する」ということは、前橋から外に出ていけない人たちにとっては、なかなかリアリティが持てないことだと思います。アフリカのこどもたちが困っているのをどうして日本人が助けるのだろうっていう（遠藤さんの）リアルな話を聞くとすごく大事なことだと思う。そんな講座だったかな。

**坂倉** 期待半分で言うと、3年後とかに「あの時話していたことが、けっこう本当になってるよね〜」とか、そういう後から振り返ることができる講座であったのではと思います。「そうそう、あの人たち、あの講座で初めて出会っていたよね〜」みたいな、振り返ってみて何かひとつの現代前橋まちなか史の、アイデアが変わったり、話が交わされた場であるといいなと思います。終わってすぐじゃないにしても、ちょっと経って、じわじわ感じられるといいなと思います。

前橋が変わろうとしているときに、このタイミングで、ポンと開催されたこの講座。何か

のきっかけの講座になればいいですね。もう一言いうと、こういう対話をする場、今はまだメジャーではないけど、こういう価値観やライフスタイルをちゃんと話す場って大事ななって思いました。まちなかでそういうことが話されていないまちに、新しい文化が生まれるわけがないので、忙しいから後回しになってしまいがちなんだけど、そういう話をする時間を自覚的にとってやってることが本当に大事ですね。継続的にちょっと先のことを話し合う。ちょっと深いことを話しているみたいな場が、講座が終わった後もなんらかのかたちで、まちなかにビルトインされているような状態が理想です。どこの場所でもいいんだけど、そういう話が時々できるといいなと思います。

**茂木** 講座全体というか自分のテーマでもあるのですが、専門化しすぎた社会を考え直すきっかけになってほしいということもありました。例えば、結構、「私なんか話していいの？」っていうことを言う方がいます。全員じゃないけど。専門化した世の中が、その人たちの阻害しているのはもったいないなと思います。あなたが生きてきたことはかけがえのないことで、あなたがいてだけで、どれだけ素晴らしいかって思っただけなんです。同時に謙虚に自分が社会や他者に対して何ができるかを考えてほしいとも思っています。

**坂倉** 特にアート業界ってみんなは全然そうは思っていないんだけど、これまでずっとアートの話をしてきた人の集まりだから、なんだかこう、誰もそういうつもりはないんだけど、排他的な雰囲気が醸し出されてしまうことが多い。アートの話も大事だけど、アートじゃない、生活に近い話って普通に生活している人にはできることが多いと思うし、それがアートがあるところで、アートじゃない生活感溢れる話ができるっていうのも豊かなことだと思います。

**茂木** 豊かさとはなんぞやですね。まちに本当のユーティリティスペースがないし、居場所がないように思います。あまりきれいになってもダメだし、ポツンポツンとベンチがあってもダメだし。何か隠れて話す場所があればいいのかなと思います。

**坂倉** そこから始まるのかもしれませんが、前橋の人たちが対話をしながら豊かに暮らしていけるきっかけとなる場所が、まちなかにできるといいですね。

**茂木** 受講生の橋本さんの話によると、前橋

のまちなかは2年後にはニョキニョキと急にお店ができたり、ものごとが動くということでした。この講座の種蒔きが何かのお役に立ってくれることを期待しています。1年間本当にいろいろありがとうございました



# 「まちなかだれでも場づくりコース」で見えて

## ■「まちなかだれでも場づくりコース」というテーマ設定

**住友** 「場づくり」は、これまで都市計画的なアプローチから取り組まれることが多かったように思います。でも、このコースは、プランナー的発想ではないですね。直感的なアプローチを大事にしているところが特色であり、重要であるように思いました。

**坂倉** そうですね。今回、講座のゲストには、各地で場づくりを実践されている方々をたくさんお呼びしました。実践者の方々には、「こういう場所でこんなことをやったら、なにか化学反応が起こるはずだ」という直感がある。マーケティングリサーチの結果ではなく、自分の時代感覚や、肌感覚から動いているように思います。

**住友** なるほど。

**坂倉** それから、昨年おこなった調査から、もっとまちなかの担い手が多様化するといいなと感じていました。特に、女性ですね。だから、女性も参加しやすい、してもいいんだな、と思える講座を設計したいと思っていました。集中ゼミゲストの熊倉敬聡さんが、「新しいライフスタイルをつくっていく」という話をされました。そのとき大切なのは、それは儲かるからとか、どこかで流行っているからとかではなく、こういうふうに生きて

いきたいからそれを実践していく、ということなんですよ。

そして、そういうふうにする人は他にもいるはずだという思いで取り組むこと。まだ他にはない、前橋でしか起こり得ないことをやろうとするときには、そういう直感的なアプローチが必要になると思います。

## ■「私がそこにいて何をやるのか」を自分で発見できるような場

**住友** 「場づくり」コースで議論やワークショップを重ねるなかで、見えてきた「場」とは、どんな場なのでしょう？

**坂倉** 「まちとそと、いろいろなものをつなぐような場」です。まちなかにある場ですが、まちなかの人のためだけにある場ではない。前橋全体と、前橋の外、海外や、東京ともつながる。また、まちなかのいろいろな資源をつなぎ、新しいプロジェクトを生んでいくような場。回遊性をつくるハブになるような場です。そこを訪れる人にとっては、カフェ的な空間だけど、飲食をするだけでなく、人とつながる出会いがあるといいですね。実践ゼミ第1回のゲスト、武山政直さんの話にもありましたが、サービスデザインという考え方も重要だと思います。ユーザーが自分たちでサービスをつくっていく。それはどういう場かという、客として関わるだけでなく、自分の人生でやりたいことや、実現したいことができるような場だと思います。これまで知らなかった人や、前橋という地域とつながり、そういう可能性が広がる場。「私がそこに行つて何をやるのか」を自分で発見できるような場になるといいなと思います。

**住友** 一方で、それで食べていけるのか？という問題はありますよね。自分のライフスタイルがそうなるかということ、経済的なことはどうつながるのでしょうか。

**坂倉** もちろん、日本円がある程度な

いと、できないこともたくさんありますよね。お金をまわすエコシステムと、それ以外のものをまわすエコシステムと、両方つくっていく必要があると考えています。ゲストの方々も、例えばHAGISOはカフェで、HANALab.は企業のシェアオフィスの部分で収益をあげ、場の運営をまかっています。

また、HANALab.の場合は、いろいろな人が出入りしている場であるということ自体が、企業と新しいプロジェクトを起こすための大きな動機付けになっています。だからこそ、女性たちが自信をもって働くためのスキルを学ぶ研修を、地元企業と一緒につくるようなプロジェクトが始まっています。小さい地域で、それぞれの人が持続できるような活動をしていく。そういう循環型のビジネスモデルが設計できるようになるということが、大事なのではないでしょうか。

## ■柔軟性をもって運営する

**坂倉** はじめから決めすぎでないことも重要だと思います。ゲストの方々の場は、それぞれが柔軟性があるように思います。実際来た人がこうだったから、こうしてみようとか。

**住友** その都度現れた条件や人に対応していくことも大事ということですね。手段までガチガチに決まっていると、それができない。

**坂倉** そうですね。

**住友** その人に応じて、その人が生きる場をつくる。大学を出たばかりの人は、自分には何ができないか不安だったりしますよね。特にその世代の人には、そういう自分のできることや、経験が活かされる場は必要のように思います。

**住友 文彦**  
(すみとも ふみひこ)さん

1971年生まれ。アーツ前橋館長。あいちトリエンナーレ2013、メディア・シティ・ソウル2010(ソウル市美術館)の共同キュレーター。NPO法人アーツインシアティヴトウキョウ(AIT)創立メンバー。展覧会=「Possible Futures: アート&テクノロジー過去と未来」展(ICC、東京、2005)、「川俣正[通路]」(東京都現代美術館、東京、2008)、ヨコハマ国際映像祭2009ほか。共著=『キュレーターになる!』ほか。

# きた、まちなかに必要な場とは？

**坂倉** 誰にとっても、自分がそこで時間を過ごしたり、何かをしたりすることによって、自分の体験に紐付いた場所になっていくといいですね。

## ■場づくりへのアプローチ

**住友** 実際に前橋で場づくりに取り組むとしたら、どういったアプローチをしますか？

**坂倉** ひとつのヒントは、対話ゼミ第2回のゲスト小山田徹さんが実施されていたWeekend Cafeではないでしょうか。2週間にいっぺんとか月1回、誰でも来られるカジュアルな飲み会のようなホームパーティのような場をひらく。今、人が集まるのはフォーマルかプライベートか、どちらかの場が多いですが、そうではなく、あいだのような場。家っぽくつろげるんだけど、出入り自由な場。

**住友** いいですね。若手で誰かやらないかな。

**坂倉** そんな場があったら、東京からもその日にあわせて行きたいと思います。その時の人の集まり方として、熊倉さんは「乱交性」と言っていますが(笑)、単なる社交性を越えて、異質なものの同士が偶発的に交わるような、そういう魅力のある場になるといいですね。

**住友** そんなふう自由に使える洋館があるといいですね。

**坂倉** そうですね。洋館はなくても、まちなかの商店街には、居住スペースつきの2階建ての建物がたくさんありますよね。なかには空き家になっているところもある。そうしたところを探したら、いい空間がありそうです。そこをみんなで掃除するところから始めたいですね。掃除をするなどして身体を動かして関わると、私の場だと思える。私の場だ、と思う人がたくさんいれば、ネットワークもその分広がります。

**住友** ネットワークの広がり重要ですね。今回のコース参加者にも、相互的な関係は生まれませんか？

**坂倉** 実践ゼミ後半は、そういう雰囲気が生まれていたと思います。実際に講座外で、受講生たちによるプロジェクトが始まったという話もありました。集中ゼミでおこなった「ギフトサークル・ワークショップ」でも、

それぞれの人が提供できることが見えたことで、これをやりましょう、という話が自然と出ていました。

一方で、まだ人と人がつながっていないが故に起こっていないことが、たくさんあるように思います。子育てが一段落した人や、学生、シニアの方々……埋蔵されているエネルギーはまだまだいっぱいある。なんらかの関わり合いがひらきさえすれば、いろいろな可能性が生まれていくのではないのでしょうか。

## ■「いろいろなものをつなぐような場」「いろいろなことが起こる場」とは

**坂倉** 今回の講座の成果は、前橋のまちなかに将来的にどのような場があったら、前橋ならではの豊かさを生み出していけるのか、そのビジョンが見え始めたことだと思います。まだ暗黙知的に共有されているだけですが、いくつか、繰り返しになるものも含めて、キーワードをあげてみたいと思います。

### <つながりが生まれる場>

→人と人、人とまちのつながりが生まれる場。

### <複合的な機能を持つ場>

→カフェとしても使え、出会いの場にもなり、自分のやりたいこともできる場。

### <全体性を大事にされる場>

→日常生活では、例えば女性は、仕事と家庭で異なる側面しか見られず、自分が分断されているという感覚を持つ人もいます。母であり、職業人である、全体性を大事にされる場では、本当に生き生きします。

### <トランジションを過ごす場>

→キャリアが一度中断されたときに、次どうしようかなとゆっくり考えたり、いろいろな人に会ったりできる場があるということは重要です。結婚や育児、転職やUターンといった転換期を迎えるときに、過ごす場です。

### <ロールモデルに出会う場>

→若者にとっては、いろいろな人がいる場合は、ロールモデルに出会う場となります。

### <創造性が刺激される場>

→みんなでわーっとつくった、その楽しさが残っている場合は、人にエネルギーを与えます。

### <人が自発的に活動する場>

→自分が地域と関わり合うこと、つながり合うことに対する基本的な気づきをおさげたときに、人は力を発揮します。

**住友** 最初に話していた、「いろいろなものをつなぐような場」「いろいろなことが起こる場」とはどういう場所なのか、具体的にイメージできますね。

**坂倉** また、今のメジャーな価値観とは異なる、新しい豊かさに出会えるということも、とても大切です。講座でも話されていた「コンパクトな豊かさ」、「必要以上に豊かになる必要がない、という豊かさ」などですね。東京では、そういうこれからの豊かさの実感を持ちにくい。これは、前橋だからこそ、リアリティを持って語り合えることのように思います。素晴らしいことだと思いませんか。前橋の動きは東京の半歩先を行くものだし、その実感や誇りが、まちなかの場を通じて多くの人に共有されることで、さらに意欲的な取り組みや次の時代の文化が生まれてくる予感がします。

# 参加者の声

サステナブルな運営が難しい(人材・お金)それを外から人材とお金を集めることが自分ではできないのでは?

なんとなく想像していることがリアルに感じられた。これからのアイディエーションはまだないものをつくる将来的なデザイン。ワクワクします!

みなさんそれぞれの意見をきちんと持って伝えようとしていて勉強になりました。

散歩を楽しむような仕掛けづくりをしたい。まちなかのおもしろスポットは人によって異なることを再発見しました。

自分にできることは、もう、まちなかに住むことしかないと思います。

みんなでやろう!

群馬大学がまちなかに移ればいいのに...と思います。保育園、幼稚園、デイサービスがあったらいい。

学生・女性・高齢者・子どもそれぞれでニーズが異なるということが印象的でした。

実際の声を聞くというのは思った以上に新鮮な体験でした。

求められていることを考える、大前提を疑うことで新しいアイデアが生まれるということに気づいた。

人の意識を変えることは本当に難しい。であれば「めぶく人」を芽吹かせることで、それ以外の人たちも底上げすることができるかも!

「場づくり」について正直ピンと来ていなかったのがスタートです。でも前回、今回と話を聞いて、どんどん楽しみになってきました。私たちだからできること、どんどん思いつきたいです。

いろいろな好きな場にもっと出てつながろうと思いました。

自分の実行力・行動力のなさが問題点かもしれないです。

受講して、人とも、人と場所をつなげていくことを自分でやりたいと思いました。

「母親の孤立」は根深い問題だからこそ、うまく解決できれば何かが大きく変わる可能性を感じました。

# STAFF

## 運営STAFF

<総合ディレクター> 茂木 一司(群馬大学教育学部教授)

<全体講師・コーディネーター>

坂倉 杏介(東京都市大学都市生活学部准教授)

井尻 貴子(NPO法人多様性と境界に関する対話と表現の研究所事務局長)

<まえばしアートスクール計画事務局>



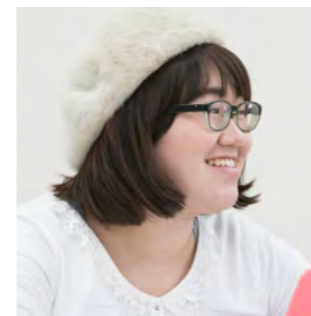
中島 千尋(なかじま ちひろ)

まえばしアートスクール計画事務局員。昨年度から継続して、まえばしアートスクール計画の事務局を担当。今年度は諸事務・諸手続きを担当。



福西 みゆき(ふくにし みゆき)

1967年東京生まれ。東京学芸大学中等科教育教員養成課程音楽科卒業。画廊・鉄スクラップ問屋・出版社などに勤務の後、2010年に前橋に移住。アーツ前橋臨時職員などを経て、平成28年度「まえばしアートスクール計画」事務局員となる。



宮川 紗織(みやかわ さおり)

1990年栃木県足利生まれ。群馬大学大学院教育学研究科教科教育実践専攻修了。北イタリアのレジオ・エミリア市の幼児教育、特に食のプロジェクト学習に共感し、食とアートの親和性の可能性を探る研究をはじめ。学生時代から群馬でのアートプロジェクトに関わり続け、平成27年度は「Bコース：フードアートスクールまえばし・『食』をアートに変換する講座」のスタッフ、平成28年度に「まえばしアートスクール計画」事務局員となる。

<記録・撮影>



高木 落子(たかぎ ふきこ)

1993年10月25日に京都の山奥で生まれ育つ。奈良県立大学地域創造学部卒業。大学在学中に「そうじ部」を立ち上げ、清掃活動を通してアートプロジェクトやまちづくりに関わる。また、障害者福祉施設でボランティアをやる中でゴミの類末を妄想するワークショップ「モウソウジ」を企画。間接的なコミュニケーションとしての清掃活動を通して、日常行為の転換を図る。現在、群馬大学教育学研究科美術専修に在籍中。

<運営>



家入 健生(いえいり けんせい)

1987年熊本県生まれ。2011年立命館アジア太平洋大学アジア太平洋マネジメント学部卒業。在学中よりNPO法人BEPPO PROJECTにて、別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」(2009/2012)、国東半島アートプロジェクト(2012)の作品制作や、アーティスト・イン・レジデンスの運営などに携わる。2013年よりアーツ前橋にて地域アートプロジェクトや滞在制作などを担当する。

<運営・撮影>



保手演 歌織(ほてはま かおり)

ブランディングプロデューサー、クリエイティブディレクター。mazeoze研究所所長、株式会社そよかぜ屋代表取締役。フリーランスの編集ライターとして活動したのち大手パルレメーカーでマーケティング業務に携わり、独立。その後出産を経て、多様性社会の新しい生き方・働き方・考え方を探求する「mazeoze研究所」を立ち上げる。

<ワークショップデザイン>



竹丸 草子(たけまる そうこ)

教育コーディネーター、ワークショップデザイナー。群馬県立女子大学文学部美学美術史学科卒業。NPO法人ワークショップデザイナー推進機構理事、NPO法人芸術家と子どもたちコーディネーター、NPO法人16歳の仕事塾コーディネーター、デザインユニットつむり代表、川崎市立富士見台小学校寺子屋富士見つ子実行委員会代表。こどもといっしょに「発見、楽しむ、感じる」のプロセスを大切にしたい場づくりをしている。ほかに高校へキャリア授業を企画、実施。

## ASSISTANT STAFF

佐藤 宏樹(東京工科大学 非常勤講師)

花岡 みどり(まえばしアートスクール計画事務局補佐)

村井 美予(まえばしアートスクール計画事務局補佐)

狩野 未来(群馬大学3年) / 木暮 萌(群馬大学3年)

毛塚 鮎美(群馬大学4年) / 中村 桂子(群馬大学4年)

## 撮影

木暮 伸也(Lo.cul.p)

## グラフィッカー

相嶋 亜紀子(書き描きの会) / 山口 千咲(書き描きの会)

## 会場データ

前橋まちなか研究室 〒371-0023 群馬県前橋市本町1丁目2-9

前橋プラザ元気21 〒371-0023 群馬県前橋市本町2丁目12-1

アーツ前橋 〒371-0022 群馬県前橋市千代田町5丁目1-16

